

# [論文] 国立ハンセン病資料館20周年のあゆみ — 歴史的な変遷とその背景を探る —

佐川 修

## はじめに

1993（平成5）年6月25日に開館した「高松宮記念ハンセン病資料館」は、2007（平成19）年に「国立ハンセン病資料館」としてリニューアルオープン、2013（平成25）年には創立20周年を迎えた。開館以来の入館者は2014年3月18日で30万人に達した。

資料館建設のきっかけは、当時、財団法人藤楓協会の理事長であった故大谷藤郎が、藤楓協会創立40周年の記念事業として「初代総裁であった故高松宮宣仁親王殿下を追慕し、あわせて過去100年にわたる日本のハンセン病事情の変遷と、その対策の真実の歴史を明らかにし後世に遺すため」に計画したものである。

資料館20年のあゆみについては『高松宮記念ハンセン病資料館 開館5周年のあゆみ』（1998年）、『高松宮記念ハンセン病資料館10周年記念誌』（2004年）、開館以来の季刊『資料館だより』にくわしく紹介している。本稿はこれらの発行物をもとに、1990（平成2）年にはじまる準備期間から20周年までのあゆみについて、同期間のハンセン病問題の動向とあわせてまとめたものである。このなかには資料館と直接関係がないと思われる記事も多々あるが、これは1993年の資料館開館以後、日本のハンセン病事情の大変化の経緯を知るためには不可欠なものである。

## 1990（平成2）年

▼7月10日 「ハンセン病資料調査会」（以下、資料調査会）発足。調査会メンバーは資料①参照。ハンセン病資料調査会規程施行。

▼8月30日 東京都千代田区の霞山会館で、資料調査会第1回専門委員会が開催される。各委員のほか、厚生省保健医療局から水田邦雄（整備課長）、竹馬功（国立療養所課長補佐）、堺宣道（疾病対策課結核・感染症対策室長）、坂本弘志（同室ハンセン病係長）、藤楓協会から大谷藤郎（理

事長）、大井良二、山田喜代治、大村田鶴子が出席。議題は①資料館に保存すべき各療養所の記録および物品について、②聞き書きの必要な人の選定など。

▼11月29日 東京都千代田区の法曹会館で、資料調査会第2回専門委員会が開催される。議題①予算、②書籍目録のカード化、③ビデオ作成など。

## 1991（平成3）年

▼3月13日 法曹会館で資料調査会総会。44名出席。議題①寄付金の概況、②資料館の設計、③資料の調査と収集について。

▼5月21日 多磨全生園（以下、全生園）においてハンセン病資料館建設計画の打ち合せ。出席者・全生園～郡司才市（庶務課長）、長沼春司（会計課長）、大和田喜一（福祉室長）。全生園入所者自治会（以下、自治会）～佐川修（副会長）、森元美代治（総務部長）、寺門勝雄（福祉部長）。藤楓協会～竹田睦男（常任理事）、山田喜代治（理事）、熱田純江。佐藤工業～河合弘（顧問）、竹内晴雄（建築工事部長）、福代治巳（課長）。

▼9月14日 学習院大学記念館において資料館建設のためのチャリティショーが開催される。「劇団コメディ・オブ・イエスタデイ」により、小川正子の半生を描いた「悲しき病世になからしめ」が上演されたが、事前に全国ハンセン病患者協議会（以下、全患協）が脚本をチェックし注文をつけた。当日は栗生楽泉園、駿河療養所、全生園から入所者が大勢バスで観劇に参加した。

▼9月25日 全生園に「高松宮記念ハンセン病資料館」建設募金協力委員会」が設置される。建設資金について、当初藤楓協会は「財界からの協力を願うので入園者には一切ご迷惑はかけない」と述べていたが、折悪しくバブルがはじけ寄付金が思うように集まらないため、全患協各支部や療養所職員の方にも協力を求めることになったものの。

資料① ハンセン病資料調査会委員名簿（順不同、○は専門委員を兼務）

|      |                       |                    |
|------|-----------------------|--------------------|
| 委員長  | 友田 政和（長島愛生園長）         | 湯川 智（神山復生病院長）      |
| 副委員長 | 成田 稔（多磨全生園長）          | 板倉 和子（琵琶崎待労病院長）    |
| 委員   | 細川 護熙（熊本県知事）          | 曾我野一美（全療協会長）       |
|      | ○藤田 真一（帝京大学教授）        | 高瀬重二郎（同事務局長）       |
|      | ○川野 楠己（元NHKチーフディレクター） | 根岸 章（同松丘支部長）       |
|      | ○酒井 シヅ（順天堂大学医学部助教授）   | 久保 瑛二（同東北支部長）      |
|      | ○大西基四夫（多磨全生園名誉園長）     | 藤田三四郎（同栗生支部長）      |
|      | 犀川 一夫（沖縄愛楽園名誉園長）      | 所 義治（同多磨支部長）       |
|      | ○小林 茂信（栗生楽泉園名誉園長）     | 井上 茂次（同駿河支部長）      |
|      | 三上 賛磨（松丘保養園長）         | 池内謙次郎（同長島支部長）      |
|      | 真山 旭（東北新生園長）          | 望月 拓郎（同邑久支部長）      |
|      | 上妻 昭典（栗生楽泉園長）         | 山本 照夫（同大島支部長）      |
|      | 根本 金重（駿河療養所長）         | 河岸 渉（同菊池支部長）       |
|      | ○原田 禹雄（邑久光明園長）        | 川邊 哲哉（同星塚支部長）      |
|      | 金網 史至（大島青松園長）         | 大山 嶺（同奄美支部長）       |
|      | 熊丸 茂（菊池恵楓園長）          | 小底 秀雄（同沖縄支部長）      |
|      | 鈴木 正和（星塚敬愛園長）         | 宮里 光雄（同宮古支部長）      |
|      | 瀧澤 英夫（奄美和光園長）         | ○佐川 修（同東部ブロック代表）   |
|      | 原 實（沖縄愛楽園長）           | ○双見美智子（同瀬戸内ブロック代表） |
|      | 長尾 榮治（宮古南静園長）         | ○太田 明（同九州ブロック代表）   |
|      | 網脇 美智（身延深敬園長）         | ○松岡 和夫（同沖縄ブロック代表）  |

▼11月19日～20日 全患協第41回臨時支部長会議で資料館建設問題についての話し合いが行われる。

## 1992（平成4）年

▼1月7日 全生園職員211名の連名で、資料館建設資金116万円の寄付がある。

▼2月25日 全生園公会堂で、資料調査会の総会が開催される。63名出席。長島愛生園、全生園の図書館の現状報告などが行われる。

▼3月14日 西武新宿線・久米川駅前で東村山市身体障害者患者連絡協議会、全生園自治会、桜華女子高等学校生徒らによる募金活動が行われる。以後、入所者、退所者、職員や一般市民から次々と募金が寄せられる。

▼6月25日 資料館建設予定地で関係者が集まり、安全祈願祭（修祓式）が行われる。

▼同日 「ハンセン病資料館建設促進対策委員会」（以下、対策委員会）発足を定める（委員長は成田稔全生園長）。これは安全祈願祭の後、関係者

が集まって話し合った席上、大谷（藤楓協会理事長）から「工事契約外である庭や周辺環境づくりと、資料の収集や展示の方法など、具体的な内容を検討し作業を進めるため、地元（全生園）の全面的な協力が必要なので、『資料館建設促進対策委員会』を設置してほしい」との要請があり、応じたものである。

▼7月20日 第1回対策委員会。確認事項①この委員会は藤楓協会から委託されたものである。②この委員会は資料調査会を補佐する立場から、資料館の開館にあわせて予算外の庭づくり、環境整備、資料調査、収集、展示などの検討、具体化の実務作業を行う。③2つの小委員会と、その連絡、計画、まとめを担う事務局を設置する。④全生園からの募金は目標額に達したので、今後集まる分については庭づくり、環境整備に使用する。⑤この資料館は全国、全園的なものなので、全生園だけの図書や資料だけでは開館できない。従って各園に資料収集の協力依頼をする必要があり、藤楓協会とは別に成田対策委員長からも要請書を



出すことになった（資料②）。

▼8月28日 対策委員会の第1、第2小委員会合同委員会が開催される。

▼9月4日 藤楓協会において丹青社の村本氏ほか3名と、ジオラマ（電光案内盤）、マネキン人形などの見積りについて話し合う。

▼10月6日 対策委員会合同会議が開催される。将来に備えての資料館西側植樹計画、経過報告などを協議。

▼10月8日 厚生省共用第4会議室において全患協10月行動に参加の支部代表（山田、本間、森、富田、近藤、平沢、曾我野、伊東、林、太田、佐川）と、藤楓協会（大谷、大和田、大村）、成田（全生園長）が話し合いを行う。席上、各代表から「どういう物が必要か見当がつかない。会員の関心を高めるためにも是非、支部へ来てもらいたい」との発言があり、これに対し大谷より「資料館建設促進対策委員会の人々が各園を回るようにするので、その時は話し合って資料収集に協力して頂きたい」との要請を行う。

▼10月12日 建設現場事務所で佐藤工業の清水所

長らより、大谷藤郎、大和田喜一、渡辺<sup>みのお</sup>穆夫、佐川修、山下十郎が、工事状況の説明を聞く。

▼10月15日 対策委員会第1小委員会が開催される。①『全患協ニュース』（号外、資料館特集）発行について、②年表づくりについて、③各園の資料収集について（資料③）。

10月から12月までは各園へ資料収集に回ったが、どこでも快く対応してくれ感謝している。全生園を含め1,300点以上の資料が収集された。

▼11月25日 資料館西側を駐車場にするため自治会立ち会いの上、成田全生園長が畑耕作者と話し合い、了解を得る。

▼12月14日 法曹会館で資料調査会専門委員会が開催される。対策委員会より平沢保治、佐川修、大竹章、山下道輔、本間清が出席し経過報告を行う。展示プランのうち「先駆者たち」については、後藤昌文、アルマウエル・ハンセン、岡村平兵衛、ケート・M・ヤングマン、北里柴三郎、渋沢栄一などの名前も出たが、人数が多くなるので見送ることにした（資料④）。

#### 資料② ハンセン病資料館建設促進対策委員会

|                                                                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                   |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>対策委員会</b><br>委員長 成田 稔<br>事務局 佐川 修 森元美代治<br>山下 道輔 大竹 章<br>寺門 勝雄 萩野 隆雄<br>本間 清 森 和男<br>長沼 春司 五十嵐 正                                                                                                                       | <b>相談役</b><br>藤楓協会理事長 大谷 藤郎<br>多磨全生園長 成田 稔<br>同 事務部長 石塚 邦夫<br>全患協事務局長 山田 義信<br>同 多磨支部長 平沢 保治<br>立川造園 立川 富男                                                                                                        |
| <b>(1) 資料収集・展示対策委員会</b><br>全生園自治会副会長 ○佐川 修<br>同 総務部長 森元美代治<br>同 資料調査担当 天野 秋一<br>同 総務委員 林野 一俊<br>同 ハンセン病図書館 山下 道輔<br>〃 佐藤 幸徳<br>『多磨』誌編集部 大竹 章<br>〃 浅野 俊雄<br>ビデオ 亀岡 光雄<br>全患協中央執行委員 本間 清<br>全生園庶務課長 長沼 春司<br>藤楓協会業務部長 渡辺 穆夫 | <b>(2) 環境整備検討委員会</b><br>全生園自治会環境衛生部 ○山下 十郎<br>同 福祉部長 寺門 勝雄<br>同 厚生部長 平野 暉人<br>同 渉外部長 小田倉繁夫<br>同 渉外委員 榊 三五郎<br>同 緑化委員 萩野 隆雄<br>全患協中央執行委員 森 和男<br>全生園会計課長 五十嵐 正<br>同 福祉係長 笠原 憲一<br>同 福祉室作業班 平野 積夫<br>藤楓協会業務部長 渡辺 穆夫 |

- ・相談役は必要に応じて各委員会に出席する。
- ・（1）は第1、（2）は第2小委員会と称する。
- ・○印は小委員長。

## 1993（平成5）年

▼1月11日 資料調査会の藤田、酒井、大和田および、対策委員会の佐川、大竹、山下道輔、石塚相談役（全生園事務部長）が建設中の資料館を見に行く。その後、全生園の第1面会人宿泊所で、阿部（藤楓協会会長付秘書課長）、大谷、成田、平沢も加わり、開館日の日程、備品の購入、レイアウト担当者の臨時雇用、リーフレット作成、図書委託販売、テレホンカードの発売、宅急便以外の大物資料（蒸留釜、軍手編機、木管、吊鐘、監禁所の格子戸など）の運搬方法など、諸問題について話し合う。

▼2月11日 マイクロバスで駿河療養所と神山復生病院へ行き、資料を受け取る。

▼3月24日 平凡社ビル・スタジオ（東京都千代田区）における電光案内盤ナレーション収録に立ち会う（佐川、大竹）。帰途丹青社（上野）に立ち寄り、打ち合せを行う。

▼4月27日 高松宮妃喜久子殿下付女官（高村、松下）が資料館の下見に来訪。大谷、大村同行。宮家の資料展示場所、妃殿下の歌碑設置場所、紅梅2本の植樹場所などについて話し合う。

▼5月20日 藤蔭寮と厚生会館に保管してあった各園提供資料を資料館に搬入する。書籍について

は山下道輔を中心に、ハンセン病図書館から運搬し、整理、書棚への展示をはじめ（資料⑤）。

また、展示用ケースやパネルなどの備品類が入荷しはじめ、2階展示室のレイアウトを行う。まず、雑居部屋を再現するため、1928（昭和3）年建築の山吹舎より天井板、帯戸、ガラス戸、へりなし畳などを運び込み、営繕係（大工）に作業を依頼する。またマネキンには着物を着せ、手や足に繻帯を巻いたり、顔に絆創膏をつけたりして昔の状況を再現した。

大竹章、栄一夫（レイアウト担当）を中心に対策委員の協力を得ながら、連日連夜、時には夜半に至るまで展示作業を行う。その間、松谷謙司より自作の「北條民雄像」と、長沼春司より自作の櫓の大テーブルが寄贈される。松丘保養園より提供されたTR釜は1トン近くの重量で、立川造園の協力でクレーンを使い2階へ上げて頂き、苦労の末、コロを使いやっと据えつけた。2階の全ての展示作業が終ったのは、開館前日の6月24日の夜半を過ぎた頃で、ほっとした思いで眠気も飛んでしまった。

▼6月19日 第1回資料館運営委員会を開催。開館に必要な次の事項を協議し決定する。①資料館運営規則、②資料館運営委員会規程、③資料館人

### 資料③ 資料収集のための各園訪問（1992年）

| 日程         | 訪問先                    | 担当                   |
|------------|------------------------|----------------------|
| 10月17日～20日 | 松丘保養園                  | 佐川、大竹                |
| 10月20日～22日 | 東北新生園                  | 佐川、大竹                |
| 10月25日～27日 | 宮古南静園                  | 成田、佐川                |
| 10月27日～29日 | 沖縄愛楽園                  | 成田、佐川                |
| 11月18日     | 栗生楽泉園 湯之沢部落跡           | 佐川、大竹、山下（道）、平野、天野、石塚 |
| 11月23日～26日 | 菊池恵楓園 琵琶崎待労病院 回春病院跡    | 佐川、大竹（恵楓園・太田同行）      |
| 11月26日～28日 | 星塚敬愛園                  | 佐川、大竹                |
| 11月28日～30日 | 奄美和光園                  | 佐川、大竹                |
| 12月4日      | 駿河療養所 神山復生病院           | 成田、佐川、大竹、平野          |
| 12月7日～9日   | 大島青松園                  | 佐川、大竹                |
| 12月9日～11日  | 邑久光明園                  | 佐川、大竹                |
| 12月11日～13日 | 長島愛生園 交流の家、北山十八間戸（奈良県） | 佐川、大竹（愛生園・宇佐美同行）     |



資料④ 資料館展示プラン

|        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |                                                                              |
|--------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|
| 1<br>F | 1 資料館設立趣旨<br>2 ハンセン病の医学的な説明<br>3 全国療養所電光案内盤<br>4 各園紹介ビデオコーナー<br>5 図書閲覧室<br>6 医学専門書展示室<br>7 映像展示室<br>8 特別室                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | ◎その他<br>イ 収蔵室<br>ロ 修復室<br>ハ 応接室<br>ニ 資料室<br>ホ 事務室<br>ヘ 受付、売店<br>ト 自動販売機（飲料水） |
| 2<br>F | <div>1. 先駆者たち</div> <div> (イ) 良観房忍性（忍性菩薩）<br/> (ロ) 一遍上人<br/> (ハ) テストウィード神父<br/> (ニ) コール神父と5人のシスター<br/> (ホ) ハンナ・リデル&amp;エダ・ライト<br/> (ヘ) 網脇竜妙<br/> (ト) メリー・ヘレナ・コンウォール・リー<br/> (チ) 光田健輔<br/> (リ) 村田正太<br/> (ヌ) 中条資俊 </div> <div> (ル) 河村正之<br/> (ヲ) 小笠原登<br/> (ワ) 井深八重<br/> (カ) 青木恵哉<br/> (ヨ) 永田良吉<br/> (タ) 小川正子<br/> (レ) 三上千代<br/> (ソ) 服部ケサ<br/> (ツ) その他 </div> <div>2. 年表に沿って（政策と患者の歩み）</div> <div>明治から平成にかけて</div> <div>3. 事件と人物</div> <div> イ. 山井道太と人権闘争<br/> ロ. 藤本事件<br/> ハ. らい予防法闘争<br/> ニ. 外島事件<br/> ホ. 長島事件 </div> <div> ヘ. 室戸台風<br/> ト. 黒髪校登校拒否事件<br/> チ. 沖縄問題（強制収容と戦争被害）<br/> リ. その他 </div> <div>4. 文学に生きる</div> <div>イ. 北條民雄 ロ. 明石海人 ハ. 村越化石</div> <div>5. 生きがいを作る</div> <div>絵、書、写真、陶芸、他</div> <div>6. 写真コーナー</div> <div>7. 独身共同生活部屋の模型</div> <div>各園資料</div> <div> 1. カセットテープ（聞き書きなど）<br/>文章化を。<br/> 2. ビデオテープ<br/>（各園紹介、30分程度）<br/> 3. スライド用、リバーサル・ネガ3枚<br/>（電光案内盤で使用）<br/> 4. 図書目録、資料目録 </div> <div> 5. その他<br/> ○皇室、藤楓協会関係の資料は特別室に展示する。<br/> ○各項に関する資料、物品<br/> ○生活物品（園券、大楓子油など）<br/> ○写真（事件、生活、記録など）パネル<br/> ○新聞、雑誌の記事<br/> ○保育所関係 </div> |                                                                              |

資料⑤ 各園提供資料の概要

| 提供者        | 資料                                                                | 点数  |
|------------|-------------------------------------------------------------------|-----|
| 松丘保養園      | 園券、TR釜、消防関係用品など41種                                                | 68  |
| 東北新生園      | 軍手編機、薬瓶、花瓶など19種                                                   | 30  |
| 栗生楽泉園      | 紫綬褒章、絵画、書、温泉木管など45種                                               | 126 |
| 駿河療養所      | パチンコ台、臼、教科書、絵画など58種                                               | 63  |
| 長島愛生園      | 自警団（消防）関係用具、焼物、明石海人愛用の文机など42種（書籍を除く）                              | 65  |
| 邑久光明園      | 金券、食器、飯台、架橋運動横断幕など52種                                             | 57  |
| 大島青松園      | 専用留置所扉、海底送水、送電線断面など13種                                            | 17  |
| 菊池恵楓園      | カブキ衣装、小道具、大楓子油、「富貴煙」（タバコ）など25種（写真類を除く）                            | 81  |
| 星塚敬愛園      | 鉄瓶、食器、短靴、義足など26種                                                  | 36  |
| 奄美和光園      | 飯釜、蛇皮線、筒鐘、書など15種                                                  | 17  |
| 沖縄愛楽園      | 米軍の薬莢で作った灰皿、食器の2種                                                 | 5   |
| 宮古南静園      | 園券、開園50周年記念誌など5種                                                  | 5   |
| 神山復生病院     | パンフレット、井深八重遺品類、七宝焼、テストウィード神父使用懐中時計、ミサ用ローソク、写真乾板など82種              | 100 |
| 琵琶崎待労病院    | 写真、リーフ、シスター用腰紐、十字架の4種                                             | 6   |
| 身延深敬園      | 網脇竜妙関係品、大鋸ほか作業用具など28種                                             | 31  |
| 栗生聖公会      | 聖バルナバ医院関係品、リー女史愛用のオーバー、室内履、自筆の絵、書籍など                              | 7   |
| 多磨全生園      | ハンセン病図書館で収集・保管してきた食器、作業用具、担い、水がめ、消防ポンプなど259種（書籍約3000冊を除く）         | 547 |
| 栗原顕一氏扱い    | ナイチンゲール賞など三上千代関係                                                  | 10  |
| 交流の家       | ポスター、マッチ、書籍など                                                     | 数十点 |
| リデル・ライト記念館 | ハンナ・リデル宛大隈重信書簡など                                                  | 5   |
| 藤楓協会       | 書籍200冊、写真など                                                       | 16  |
| 高松宮家       | 宣仁親王、喜久子妃両殿下拝領の貞明皇后ゆかりのお品、宣仁親王殿下御作「茶碗」（銘・花筐）、喜久子妃殿下下画「光明皇后」（掛軸）など | 29  |

事体制、④資料館業務内容、⑤その他。館長には大谷藤郎、運営委員会委員長（以下、運営委員長）には成田稔が就任（資料⑥、⑦、⑧）。

▼6月23日 警備保障の工事、エレベーター点検ともに終了。

▼6月24日 開館記念として、研修展示室に全生園入所者の陶芸、籐細工、編物などを展示。ロビーに川瀬広の盆栽を特別展示する。

▼6月25日 午前9時30分より中央集会所で資料

調査会を開き、同会を解散する。

## 高松宮記念ハンセン病資料館開館

▼6月25日 午前11時資料館西側駐車場に設営された巨大テントのなかに、関係者200人が参列し「高松宮記念ハンセン病資料館落成記念式典」が開催された。まず主催者・石川六郎藤楓協会会長挨拶と、総裁・高松宮妃喜久子殿下のお言葉があり、来賓の丹羽雄哉厚生大臣（代理・黒木武弘事



## 資料⑥ 高松宮記念ハンセン病資料館運営規則

### (設置)

第1条 全国より苦難の道を歩まれた患者さんと、貞明皇后さまをはじめ皇室の方々、またその一生を捧げられた先駆者の活動を主として収集し、保管及び展示して、社会の誤解と偏見を二度と繰り返さないよう正しい理解を深めるため、高松宮記念ハンセン病資料館（以下、「資料館」という）を次のとおり設置する。

名称 高松宮記念ハンセン病資料館

位置 東京都東村山市青葉町4-1-13

### (管理)

第2条 この資料館は財団法人藤楓協会が管理運営する。

### (事業)

第3条 資料館は、第1条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 主としてハンセン病にかかわる文献、写真、フィルム、実物、模型等の資料（以下、「資料」という。）を収集し、保管及び展示すること。
2. 資料の利用に関し、必要な説明、助言及び指導等を行うこと。
3. 前号のほか、目的を達成するために必要な事業。

### (入館料等)

第4条 資料館の入館料は無料とする。

### (開館時間)

第5条 資料館の開館時間は当分の間午後1時より午後4時までとする。特に必要があると認めるときは、これを変更することができる。

### (休館日)

第6条 資料館の休館日は、次のとおりとする。ただし、委員会が特に必要があると認めるときは、これを変更し、又臨時に休館日を定めることができる。

1. 月曜日及び金曜日
2. 国民の祝日
3. 年始 1月1日、2日、3日、4日
4. 年末 12月28日、29日、30日、31日

### (損害賠償)

第7条 入館者は、資料館の施設、資料等を毀損又は滅失させたときは、委員会が相当と認める損害額を賠償しなければならない。ただし委員会は、やむを得ない理由があると認めたときは、賠償額の一部又は全部を免除することができる。

### (諮問委員会及び委員会の設置)

第8条 資料館に高松宮記念ハンセン病資料館諮問委員会及び運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2. 諮問委員会は、館長の諮問に応じ資料館の基本的な運営事項を審議し、意見を述べる。
3. 運営委員会は、資料館の事業に協力する。

### (委員の任期)

第9条 委員会の委員の任期は2年とし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。ただし再任を妨げない。

### (組織)

第10条 資料館の運営組織は別表のとおりとする。

### (委任)

第12条 この規則の施行に関し、必要な事項は、資料館々長が定める。

務次官) および、鈴木俊一東京都知事の祝辞があった。

アトラクションでは五十子大三と、コール・トロイメント女性合唱団40名によるコーラスがあり、「武蔵野」、「早春賦」、「ペチカ」、「なら山」、「さらばナポリ」など若い歌声が会場を包んだ。

その後、資料館前庭に移動し、妃殿下からご下賜の歌碑「残りたるよはいいとひて春秋を共にたのしくすぐせとぞ思ふ」の除幕式が行われ、大谷藤郎(資料館館長)、上妻昭典(全国国立ハンセン病療養所所長連盟〔以下、所長連盟〕会長)、高瀬重二郎(全患協会長)、平沢保治(全患協多磨支部長)によってロープが引かれた。さらに大谷の先導で喜久子妃殿下のお印である紅梅2本の植樹があり、つづいて正面玄関前で妃殿下によるテープカットが行われた。早速、成田稔(資料館運営委員長)の案内で妃殿下をはじめ、寛仁親王、同妃殿下、財界、自治体、厚生省関係、所長連盟、全患協の関係者など、来賓の皆様が館内を熱心に観覧された。

資料館は全生園東の一角にあり、敷地4,800平方メートル、床面積延べ1,711平方メートルの鉄

筋2階建てで、1階はホールを中心に受付カウンター、事務室、応接室、図書室、研修室、ビデオホール、修復室、倉庫、プライベートルームなどで、2階は全て展示室である。



高松宮記念ハンセン病資料館落成記念式典

- ▼6月26日 一般の見学はじまる。初日84人。
- ▼6月27日 NHK教育テレビ「心の時代」で、大谷の話と資料館の紹介がある。
- ▼6月29日 「第9回全国友園カラオケ交歓会93『祝・資料館オープン』」が全生園公会堂で開催され、全参加者が資料館を見学する。
- ▼7月10日 横浜共立学園生徒60人が来館。はじ

#### 資料⑦ 高松宮記念ハンセン病資料館運営委員会規程

##### (目的)

第1条 高松宮記念ハンセン病資料館運営規則第8条第1項により委員会を置いて円滑な運営をする。

##### (組織)

第2条 委員会は委員15人以内で組織する。

2. 委員会において特に必要があると認めるときは、臨時委員をおくことができる。

##### (委員)

第3条 委員は財団法人藤楓協会理事長が委嘱する。

2. 委員の任期は2年とし、補欠の委員の任期は前任者の残任期間とする。ただし再任を妨げない。

3. 臨時委員は当該特別の事項の審議が終了したときは退任するものとする。

##### (委員長)

第4条 委員会に委員長を1人置き、委員の互選とする。

2. 委員長は委員会を代表し、会務を総理する。

3. 委員長は館長の命を受け必要に応じ委員を招集することができる。

##### (庶務)

第5条 委員会の庶務は財団法人藤楓協会において処理する。

##### (委任)

第6条 この規程の施行に関し必要な事項は財団法人藤楓協会理事長が定める。

##### 附則

この規程は、平成5年6月25日から施行する。

資料⑧ 高松宮記念ハンセン病資料館の人事体制と業務内容

|          |      |    |     |        |    |
|----------|------|----|-----|--------|----|
| 館長       | 大谷   | 藤郎 | 勤務者 | 佐藤     | 幸徳 |
| 運営委員会委員長 | 成田   | 稔  |     | 川島     | 義教 |
| 運営委員     | 村上   | 国男 |     | 平野     | 洋子 |
|          | 石塚   | 邦夫 |     | 屋嘉部美智子 |    |
|          | ○大和田 | 喜一 |     |        |    |
|          | ○鈴木  | 修幸 |     |        |    |
|          | 山田   | 義信 |     |        |    |
|          | ○平沢  | 保治 |     |        |    |
|          | 大竹   | 章  |     |        |    |
|          | ○山下  | 道輔 |     |        |    |
|          | ○佐川  | 修  |     |        |    |

○印は事務局兼勤務

運営協力会（自治会内におく）

今後資料館についての寄付、問合せなどがある時は、協力会が運営委員会への取りつぎを行う。

委員 自治会 総務部長（代表）

- 〃 福祉部長
- 〃 厚生部長
- 〃 渉外部長
- 〃 環境衛生部長
- 〃 主任書記

資料館 鈴木修幸

高松宮記念ハンセン病資料館業務内容

◎勤務について

1. 原則として毎週月曜日と金曜日、及び祭日を休日とする。
2. 勤務時間は午後1時より4時までとする。
3. 但し、団体（20人以上）等で事前に連絡のある場合は、午前中又は休日でも開館することもある。
4. 館員は原則として、交替で1ヵ月13日勤務とするが、毎週月曜日（休日）午前中は全員で館内清掃を行う。
5. 運営委員は随時出勤する。

◎業務内容について

1. 受付、(イ) 記帳 (ロ) 電話の取り次ぎ (ハ) リーフレット渡し (ニ) 各園出版物の販売
2. 会場の案内
3. 不自由な人のお世話
4. 各園ビデオテープの操作
5. 電光案内盤の操作
6. コンピューターの操作
7. 製本
8. 本の修復
9. コピーの取り扱い（実費を頂く）
10. 館内の清掃（清潔を保つため留意する）
11. トイレの汚れに留意する
12. 注意事項、(イ) 全館禁煙 (ロ) 館内〈2F〉撮影禁止 (ハ) 展示物に手を触れないこと (ニ) 車イス可、電動車イス不可、乗り替えの車イス4台用意あり
13. 館内の見回り、図書閲覧室、2階の展示室を時々見回る
14. 閉館の際は館内の点検、特に火気、電気、水道、戸締りには充分留意する



めての団体見学となる。同日、韓国KLM（キリスト教救らい協会）一行25人、園内関係者同行で見学。

▼7月20日 札幌市立高等看護学院生徒36人が来館。看護学校としては最初の来館。

▼7月27日 対策委員会、「高松宮記念ハンセン病資料館」建設募金協力委員会を解散する。

▼8月5日 栗生楽泉園より28人が来館。

▼10月1日 『資料館だより』創刊号発行。

▼同日 『多磨』第74巻第10号で資料館の特集が組まれる。

▼10月5日 菊池恵楓園親善団一行来館。

▼10月7日～30日 全生園附属看護学校生による「全生園の緑を考える」展を研修展示室で開催。

▼10月18日 松丘保養園親善団一行来館。

▼10月22日 曹洞宗宗務庁僧侶40人が来館。

▼10月25日 日本で最初にプロミン合成に成功した、東京大学名誉教授の石館守三が来館。プロミン投与第1号の湊一義と再会をはたす。

▼10月26日 東村山市立第五中学校2年生200人が来館。古新聞、空缶などの回収益金5,425円の寄付を受ける。

▼11月1日～12月20日 埼玉県立近代美術館より「病醜のダミアン」像（舟越保武作）を借り受け、資料館1階ロビーに展示。同時にビデオホールで「ダミアン神父」を随時放映し、観覧者に感動を与える。

▼11月11日 山梨県春日居町立郷土館（小川正子記念館を含む）より、小川美彦教育委員会次長ら運営委員10人が来館する。

▼11月10日 大谷藤原著『ハンセン病・資料館・小笠原登』（藤楓協会）発行。

▼11月23日 「東村山市緑を守る市民協議会」が全生園を散策し、150人が資料館を見学。

▼12月24日 「世界ハンセン病友の会」（事務局東京・三輪照峰代表）が、四国霊場75番札所の香川県善通寺に建立（1993年11月26日）した「母娘遍路像」を、大島青松園自治会との約束により資料館へ寄贈し、1階ロビーに設置した。



母娘遍路像除幕式

## 1994（平成6）年

▼1月12日 資料館オリジナル絵はがきの販売を開始。

▼1月20日 母娘遍路像の開眼式が行われる。当日は藤楓協会、資料館、全生園、全生園自治会、真言宗大師講、像製作者など50数人が出席。真言宗智山派東京北部教区9カ寺の僧侶による開眼法要の後、式辞、祝辞、感謝状贈呈、祝電披露などが行われた。会場には真言宗智山派総本山智積院、大本山川崎大師、大本山成田山新勝寺、世界ハンセン病友の会から贈られた生花が飾られ、華やかなムードに包まれた。

▼2月3日 熊本の「リデル、ライト両女史記念館」がオープン。関係資料を資料館のロビーに展示する。

▼2月5日 資料館正門両側の門柱が完成。成田運営委員長の寄付によるもの。

▼2月8日～27日 国立多磨研究所元所長・阿部正英が描いた外国、日本の風景画42点の「パステル画」展を、資料館研修展示室で開催。

▼3月26日 公開セミナー「ハンセン病の歴史を語る」を、資料館ビデオホールで開催。講師は成田稔、質疑応答も行われる。参加者59人。

▼4月20日～6月30日 「多磨全生園・神山復生病院 昔むかし写真展」を、資料館研修展示室で開催。開所から終戦までの建物、生活、作業、宗教、行事など、何れもガラス乾板から神田写真弘社でパネル化して、半折、全紙あわせて83点を展示する。

▼5月14日 盛岡市で開催された第67回日本らい

学会において、藤楓協会の大谷理事長が「らい予防法は廃止して新法をつくるべきだ」との個人的見解（大谷見解）を表明。新聞各紙で報道され、大きく波紋を呼ぶ。

▼6月25日 全生園公会堂において、高松宮記念ハンセン病資料館開館1周年記念シンポジウム「らい予防法改正問題をめぐって」を開催。

講師は大谷藤郎（資料館館長）、中谷謹子（大東文化大学法学部教授、慶應義塾大学名誉教授）、村上国男（所長連盟会長、全生園長）、高瀬重二郎（全患協会会長）の4名で、司会は成田稔（資料館運営委員長）。

参加者は松丘保養園、東北新生園、駿河療養所、長島愛生園、邑久光明園、星塚敬愛園の園長や、松丘保養園、東北新生園、栗生楽泉園、全生園、菊池恵楓園の自治会関係者をはじめ、大阪、神戸からも看護協会、真宗大谷派、曹洞宗宗務庁、日本患者同盟、回復者の会など200人以上で、予防法への関心が高まってきていることを示していた。

各講師の発言では、いずれも現行法は人権無視の悪法で、欠陥が多く改正か廃止すべきだが、「そのためには入所者の現状の処遇保障が先決である」との共通認識が示された（7月1日発行の『全患協ニュース』No.779に詳細を掲載）。その後、会場の10人の方との質疑応答があり、「終生隔離撲滅政策を推進してきた当時の所長たちは、歴史的な事実を総括して贖罪すべきだ」、「予防法は回復者の外来診療に逆効果。将来、地域の障害者がハンセン病療養所を利用することはできないか」など、後の基本法に関連するような意見も出され、実りのある集会であった。

▼6月29日 資料館が日本博物館協会に入会する。

▼7月10日 資料館研修室において、難病・精神障害者団体などの交流会を開催。全国精神障害者家族連合会、あせび会、東村山市なんてんの会、けやき会、身体障害者患者連絡協議会、全患協、全生園自治会が参加。大谷（資料館館長）、成田（資料館運営委員長）もオブザーバーとして出席。計60人が参加し、お互いが日頃悩んでいることなどを話し合い、交流を深めた。

▼9月13日～10月12日 「国吉信遺作展」を、資

料館研修展示室で開催。

▼9月28日 タイ、フィリピンの保健関係者数人が来館。

▼9月 熊本の待労院診療所入所者の井出隆から、著書の寄贈を受ける。同人からはその後もたびたび著書の寄贈を受け、『ロザリオの珠につなぎて』（1989年）、『良き人生』（1994年）、『この道』（1994年）、『ただいまっ』（1996年）、『人生は神様の脚本』（1997年）の5冊で合計4,000部以上の寄贈を受ける。寄贈図書は資料館ロビーに置き、希望する来館者には無料で配布することにする。

▼10月22日 版元・創元社の了解を得て、北條民雄著『いのちの初夜』（「望郷歌」、「間木老人」を含む）を資料館名義で発行。1,000円で販売。

▼10月25日 資料館開館1周年記念シンポジウムの記録『シンポジウム「らい予防法」をめぐって』を、皓星社からブックレットとして発行。1冊800円。

▼11月1日 東村山市制30周年を記念して「東村山30景」が決定される。全生園と資料館も選ばれ、資料館北側に標識が設置される。

▼11月8日 所長連盟が大谷見解を支持し、らい予防法廃止の統一見解を出す。

▼12月16日 午前、真宗大谷派第28回全国青年研修会一行77人が資料館を見学。午後は全生園公会堂で一般の人も交えて、藤井善（伊奈教勝、長島愛生園入所者、僧侶）の体験談を聞く。

▼この年に寄せられた来館者の声は、一般520、児童183、看護学校65、計768。

## 1995（平成7）年

▼2月20日 全生園公会堂で『柊の垣はいらない』の出版記念会が開催される。同書は真言宗の熱心な信者であった桜沢房義さんが、生前に三輪照峰（世界ハンセン病友の会）と保護者の倉橋敏夫に発刊を依頼していたもので、内容は光田健輔、小笠原登、林芳信、馬場省二、大西基四夫、成田稔らの文章を収録したものである。時代的背景や立場の違いはあるものの、何れもハンセン病問題に生涯をかけ、その医療に献身された医師たちであり、貴重な記録といえる。なお、主催者よ



り資料館へのご芳志と、書籍200冊の寄贈があった。

▼2月22日～3月30日 地元東村山市立青葉小学校6年生が、全生園や資料館で学んだこと、思ったことをそれぞれ記事にした「全生園ハンセン病の人々から学ぶ一〇〇人の一〇〇の新聞」展を、資料館で開催。

▼3月3日 中国のハンセン病看護研修団一行9人が来館。

▼4月18日～6月30日 「菊池恵楓園・琵琶崎待労病院 昔むかし写真展」を、資料館研修展示室で開催。

▼4月22日 日本らい学会がらい予防法廃止に向けての統一見解を発表。新聞やテレビが大きく報道する。

▼5月1日 2階展示の説明文と年表、ハンセン病の知識、関係写真を記載したガイドブック『ハンセン病資料館』を発刊する。

▼5月12日 ハンセン病予防事業対策調査検討委員会（委員長・大谷藤郎）が中間報告を出す。

▼6月25日 資料館開館2周年記念フォーラム「ハンセン病の歴史を探る」を、全生園コミュニティセンターで開催。厚生省、東京都、東村山市、同教育委員会、朝日新聞東京厚生文化事業団が後援。今回は青森、熊本、岡山、山口、大阪、名古屋、静岡、関東6県、地元東京からは都内14区、三多摩17市などから350人が参加。世論の盛り上がりを感じた。平沢運営委員の司会で、はじめに大谷館長が「らい予防法は社会問題化しており、真正面から取り組むべきだ」と挨拶。

講師の藤野豊（埼玉大学講師）と藤田真一（元帝京大学教授）は、「予防法」の名のもとに強制隔離収容や断種などがどのように行われてきたか、歴史的な背景と国の政策の誤りを指摘した。つづいて鈴木禎一（元全患協事務局長）と、成田稔（資料館運営委員長）は、過去に患者や家族がどのような迫害を受けたか具体例をあげ、「ハンセン病の歴史を風化させてはならない」と述べた。その後会場から8人が発言、「感動した」、「同和問題と同根だ」、「国はこの問題を教育面でも取り上げるべきだ」との意見が相次いだ。

▼7月6日 厚生省保健医療局長の私的諮問機関

である「らい予防法見直し検討会」（座長・大谷藤郎）の第1回が開催される。らい予防法廃止後の法整備について検討することを目的に設置されたもの。

▼8月6日 難病、精神障害者団体の第2回交流会が資料館で開催された。

▼8月10日 らい予防法見直し検討会の第2回が資料館で開かれ、メンバーが全患協と意見交換を行い、その後資料館を見学。

▼9月12日 資料館テレホンカードを発売。

▼9月27日 資料館関係者14人が栃木県大田原市の国際医療福祉大学（学長・大谷藤郎）へ研修に行く。

▼9月30日 映画監督の中山節夫が『見えない壁を越えて』の台本を持参。検討をはじめ。

▼10月26日～11月26日 全生園附属看護学校生らによる「ハンセン病の明日を考える」展を、資料館で開催。

▼11月1日～3日 全生園まつりの期間中、資料館は午前中も開館する特別態勢を組む。

## 1996（平成8）年

▼1月10日 日本弁護士連合会から15人が来館。成田運営委員長の話を聞き、展示室を観覧。その後、全患協や入所者（金子保志、渡辺立子）の話を聞く。

▼2月21日 午前10時30分、衆議院厚生委員会（委員長・和田貞夫）一行13人と、衆議院参事、調査室関係者など7人を乗せた衆議院のバスが資料館に到着した。一行は厚生省（松村明仁保健医療局長ほか10名）と、全生園幹部、全患協、全生園自治会、資料館（大谷館長ほか）など多数の出迎えを受け、まず納骨堂へ直行。3,765人の先人たちの霊に花束を捧げ、手をあわせた。

その後、資料館の展示品を観覧。平沢運営委員の「らい予防法によって先輩や私たちがどれほどの差別や偏見を受けてきたか」の説明に、深くうなずいておられた。資料館より全生園事務本館会議室に移動。高瀬全患協会長が「らい予防法廃止は人間性の回復につながる。26,000柱の先輩たちに、悲願達成を謹んで報告したい」と述べると、和田委員長は「審議に先立ち認識を深めることが



できた。らい予防法は人権を侵害しており、ハンセン病の皆さんに本当に申し訳ない。この国会で廃案とするが遅きに失した。十分ご意見を聞き入れるように、付帯決議について理事の皆さんと相談したい」と話しておられた。

▼3月20日 IDEA（ハンセン病回復者の国際組織）のP・K・ゴパール（インド）と、のアンウェイ・スキンスネス（アメリカ）が、湯浅洋（笹川記念保健協力財団）、大谷館長、通訳とともに資料館に来訪。関係者と懇談する。

▼4月1日 「らい予防法の廃止に関する法律」が施行され、らい予防法が廃止される。資料館では、らい予防法廃止関連の各新聞記事をパネルに展示したところ、来館者が群がって立ち読みをしていた。

▼4月6日 映画『見えない壁を越えて』の中山監督、助監督、製作、撮影のスタッフ5人が来訪。桜並木の花見風景を撮影する。

▼4月13日 菅直人厚生大臣が来館。展示を見た後、納骨堂で献花。その後満開の桜並木を歩いて全生園公会堂へ行き、満員の入所者、職員に向かって挨拶し、らい予防法の廃止が遅れたことについて、深々と頭を下げ謝罪を行った。



謝罪する菅厚生大臣

▼5月1日～6月30日 「邑久光明園・大島青松園 昔むかし写真展」を、資料館研修展示室で開催。6月11日には光明園よりバスで24人が見学に訪れる。

▼5月10日 全生園自治会主催の「復権元年・記念祝賀会」が全生園コミュニティセンターで開催され、200人が参加。

▼5月12日～13日 全患協は第48回臨時支部長

会議（会場・多磨支部）で、名称を「全国ハンセン病療養所入所者協議会」（略称・全療協）と変え、更にハンセン病の歴史を映像化するための映画『見えない壁を越えて』の製作を支援することを決定した。

▼5月24日 成田稔著『『らい予防法』四十四年の道のり』（皓星社ブックレット・3）発行。

▼6月4日 全療協主催の「予防法廃止・新法制定記念集会」が、都内椿山荘で開催される。以後、各園でも次々と「記念の集い」が開催される。

▼6月23日 資料館開館3周年記念シンポジウム「これからをどう生きるか」を、全生園コミュニティセンターで開催。北は青森、南は沖縄から336人が参加。成田運営委員長挨拶の後、佐川運営委員の司会で佐藤エミ子（あせび会会長）、菅原進（全国精神障害者団体連合会副代表）、屋鋪恭一（HIVと人権・情報センター）、神美知宏（全療協事務局長）が、それぞれの立場から周りの無理解、偏見、差別のあるなかで、どう生きるかについて切実な訴えを行った。

助言者の大谷館長は「どう生きるかということは人間としての普遍的な課題であり、それぞれの立場は違うが自分だけの幸せは認められない。21世紀はともに生きる社会をつくるため、全ての人と一緒に努力すべきだ」と述べた。その後会場の7人の方と菅厚生大臣の謝罪などについて、活発な質疑応答が行われた。

▼8月24日～25日 東村山市商工会が、らい予防法廃止を記念し「一層の理解と交流を」をテーマに、資料館北側桜並木で「サマーフェスティバル」を開催した。舞台では和太鼓、琴の競演、プロによる歌謡ショー、民謡やカラオケ大会、チビ子広場のミステリー館やポニー乗馬、ミニSL、木工細工、更に模擬店もたくさん出て大賑わい、これを朝日新聞が大きく取り上げ、夜の部の盆踊りは三重、四重の輪になった。この2日間で資料館に立ち寄った人は、24日が656人、25日が390人、計1,046人で開館以来の記録となった。

▼8月31日 「横浜で在日外国人にハンセン病が多発している」などとした、日本ハンセン病学会会長・高屋豪瑩<sup>こうやこうよう</sup>（弘前大学医学部附属脳神経疾患

研究施設教授)の投書「ハンセン病が抱える問題点」が東奥日報夕刊に掲載される。翌月、全療協は高屋会長に対し、「差別、偏見解消への努力に水を差す」とする抗議文を送付。翌年1月、日本ハンセン病学会幹事も、投書内容を「事実誤認」と断じた警告文を送る。

▼9月2日 法曹会館で『見えない壁を越えて』の映画製作委員会が開かれ、関係者22人が出席。撮影状況、シナリオなどについて質疑が行われた。

▼9月6日 日活株式会社の山口友三ほか1名来館。1993(平成5)年の同社倒産以来3年ぶりの復活第1号として、ハンセン病関連作品である遠藤周作原作『わたしが・棄てた・女』を、『愛する』と題して映画化することになったとの話を聞く。10日脚本を持参。17日、熊井啓監督ほか2名来訪。全療協・神事務局長、資料館・大竹、佐川が話を聞き、不満の個所の指摘を行う。

▼10月1日～11月17日 「趙昌源 絵画展 韓国ソロクト 小鹿島の光と影」を、資料館研修展示室で開催。趙は韓国ソウル大学医学部を卒業し、1961年～1964年と1970年～1974年までの2度にわたり延べ9年間、韓国の国立小鹿島病院(以下、小鹿島病院)院長として活躍した人物である。在任中は患者やその家族の人権を回復し、偏見・差別をなくすために島内一切の悪習を廃止、患者たちには歓迎されたが島民や付近の住民には反感をもたれたという。その後、癡詩人・韓何雲と知り合い大きな影響を受け、その詩像をモチーフに小鹿島や患者たちの油絵を次々と描いた。展示する50点の作品は全部資料館に寄贈された。絵画展オープンには趙夫妻も来館され、当時、日本からのボランティアとしてオマド干拓団に参加した早川さんらも来館し、趙との旧交をあたためた。

▼10月11日 日活から山口、福田(シナリオ担当)の両名が来館。成田、戸田(全療協中執)、大竹、佐川と閉館まで話し合う。激論となるも資料館としては支持も協賛もしないとの結論になる。

▼10月14日 リーフレット「小学生のためのハンセン病の知識」、「中学・高校生のためのハンセン病の知識」を各500部作成。受付に置いて、誰に

でも自由に利用してもらうことにした。

▼11月16日 日活映画『愛する』に出演する小林桂樹、鴨川てんしほか2名が来館。これは熊井啓監督より「ハンセン病を理解するため、出演者は資料館へ行ってくるように」とのアドバイスがあったとのことで、以後、岸田今日子、松原智恵子、主演の酒井美紀らが順次来館し、案内を行った。

▼11月21日～12月22日 全生園附属看護学校・ハンセン病研究班と、淑徳短期大学社会福祉学科・柳屋ゼミの「予防法についてのアンケート」と、「ハンセン病について」の展示会を、資料館研修展示室で共同開催する。

## 1997(平成9)年

▼2月4日～3月2日 大阪人権博物館において「病と隔離—日本の近代とハンセン病」をテーマに、パネル展が開催された。貸し出し依頼を受け、関係各園の了解を得たうえで、資料館から外島保養園のものを中心に写真を貸し出した。

▼3月1日～4月20日 「好善社慰魔園回顧展」を、資料館研修展示室で開催。1日には藤原偉作(好善社理事長)、成田稔(資料館運営委員長)、秋津教会、元慰魔園関係者ら多数が出席してテーブルカットが行われた。大竹、佐川が藤原宅に伺い、たくさんの写真、資料などを頂いたり、借り受けて展示を行った。

社団法人好善社は1877(明治10)年英国の宣教師ケート・M・ヤングマンらによって設立され、現在でも「全国学生・社会人キリスト者ワークキャンプ」をはじめ、タイ国など東南アジアへも活動の輪を広げている。慰魔園は1905(明治38)年、好善社の事業として東京府荏原郡目黒村に私立病院として開設された。第一区府県立全生病院が開設されると、政府の委託を受け一時救護所の役目を果たしたが、1942(昭和17)年、経営難により閉鎖。患者56名は多磨全生園に移った。運営48年間の収容患者数は4,159名に達した。

▼3月20日～22日 東京都新宿区の福島音響で、中山映画製作の『見えない壁を越えて』の編集と音入れ作業が行われ、大竹、佐川が夜半まで立ち会い、最終チェックを行う。



▼3月31日 午後1時30分より有楽町マリオン（東京都千代田区）において、声なき者たちの証言『見えない壁を越えて』の試写会が行われた。らい予防法廃止1周年を記念して、藤楓協会と全療協、資料館、中山映画が企画、前年2月より全国15カ所の国立、私立ハンセン病療養所、その他で撮影した記録映画である。試写会当日は藤楓協会総裁である寛仁親王殿下をはじめ、厚生省、藤楓協会、全療協、日本ハンセン病学会、所長連盟、全医労などの関係団体と、報道関係者ら700名余りが参加。試写会としては異例の超満員の盛況であった。この映画は公立療養所ができる以前の宗教家たちの救済活動にも触れるとともに、1909（明治42）年以来90年にわたる「強制隔離收容政策」を100人にのぼる証言で告発したものである。

▼4月1日 資料館前の西武バス停留所の名称が、「国立多磨研究所」から「ハンセン病資料館」に変更される。

▼4月4日 日本ハンセン病学会会長・高屋豪望<sup>こうや こうよう</sup>に対するインタビュー記事が毎日新聞に掲載される。そのなかで高屋は、「らい予防法廃止は間違いだった」、「あなたが患者なら私は逃げる」、「患者が社会に受け入れられるはずがない」と、時代逆行の発言を行う。全療協は、当人に加え弘前大学医学部学部長、日本ハンセン病学会庶務幹事に抗議文を送り、即刻会長辞任を求めた。

この問題に対し日本ハンセン病学会は、5月22日に青森県弘前市で開催された第70回総会において、成田稔庶務幹事名で謝罪文を出すとともに、高屋会長が自発的に辞任したことを発表した。また高屋会長を選んだ現幹事全員が辞任し、次期幹事内定者も全員が辞退。次期会長は菊池一郎（宮古南静園長）に決まったが、一医師の時代錯誤の妄言による各方面への影響は大きく、その責任は重大である。

▼4月9日 資料館駐車場で恒例の全生園観桜会開催。各センター（不自由者棟）単位のコーラスや民謡、八王子マジックグループのマジックショーが行われ、模擬店も出て賑わう。

▼4月16日 全生園真言宗の大師堂建立15周年記念式典に際して来園された、総本山智積院、成田

山新勝寺、平間寺（川崎大師）、高尾山薬王院有喜寺、金剛寺（高幡不動尊）などの高僧23人と御詠歌衆、全生園太子堂信者25人により、資料館内「母娘遍路像」の法要が行われる。

▼5月1日～6月29日 「松丘保養園・長島愛生園 昔むかし写真展」を、資料館研修展示室で開催。長島愛生園より25人がバスで見学に訪れる。

▼5月6日 「小学生のためのハンセン病の知識」、「中学・高校生のためのハンセン病の知識」を5万部増刷する。

▼6月22日 資料館開館4周年記念として、全生園コミュニティセンターで記録映画『見えない壁を越えて』の上映会を開催。

新聞、市報、『全療協ニュース』に関連記事が載ったこともあって、資料館には電話による問い合わせが次々と寄せられた。当日は地元東村山市をはじめとした都内4区15市のほか、埼玉、神奈川、千葉、群馬、山梨、静岡、大阪、福岡などから500人以上が集まった。会場に入らなかった50人余りは、資料館で同映画のビデオによる鑑賞を行った。上映前開会挨拶に立った成田運営委員長は「この映画はハンセン病の歴史を証言した映像である」と述べ、大谷館長は「ナチスによるユダヤ人虐殺を取り上げた『ショア』という9時間の証言・記録映画があるが、この映画はハンセン病の『ショア』である」と述べた。また中山監督は幼い頃からのハンセン病との関わり、黒髪校事件の差別に怒りを覚えて映画『あつい壁』をつくったことに触れた上で、らい予防法廃止を知り「どうしてもこの映画をつくりたかった」と述べた。映画に対しては、たくさんの感想文が寄せられた。

▼7月17日 前日に東京都立川市で開催された全国ハンセン病療養所所在市町連絡協議会（以下、市町連絡協議会。会長は細渕一男東村山市長）の一行35名が、全生園へ来訪。納骨堂で参拝の後、公会堂で施設幹部、自治会、全療協役員と懇談を行い、資料館へも来館された。なお、16日の総会では全療協の要請に関し次の決議を行い、厚生省への要請を行った。①医師並びに職員体制の充実、②医療機関、医薬品等の整備、③盲人・高齢者・障害者対策の促進。④ハンセン病を正しく理



解するための啓発事業の促進、⑤社会復帰者への支援策の早期確立、⑥学校教育における児童啓発。

▼10月30日～11月19日 ニューヨークの国連本部1階展示室で、「尊厳の確立」をテーマにWHO（世界保健機関）主催の展示会が行われた。ハンセン病の差別、偏見をなくすための国連本部の催事ははじめてで注目を集めた。資料館から資料を提供したほか、日本財団<sup>(1)</sup>やIDEAも協力した。

▼11月30日 午後1時より資料館において「ハンセン病の差別・偏見を越えて」をテーマに講演会が行われた。はじめに成田運営委員長が「資料館は何のために」と題して30分間、つづいて伊波敏男（元全生園入所者）が「家族・社会とともに～『花に逢わん』から」と題して約2時間講演し、満員の参加者に深い感銘を与え、その後5時近くまで質疑応答が行われた。

▼12月7日 東京、大阪、京都の大学教員が主催している、生命倫理研究会の第8回フォーラム「ハンセン病を考える」が、午後1時より資料館において開催された。成田運営委員長が医師の立場から、佐川運営委員が当事者の立場から、それぞれプロミン登場以前と以後、らい予防法、強制収容の実態などを述べて問題を提起した。その後、栃木、埼玉、千葉、東京、長野、静岡、京都、大阪などからの参加者が次々と質問、意見を述べ、5時頃まで討議を行い、根深いハンセン病問題への理解を深め合った。

## 1998（平成10）年

▼1月8日 東京弁護士会の1997年度「東京弁護士会人権賞」に、全生園自治会の平沢保治会長が選ばれた。らい予防法廃止と、社会的差別から患者の人権を守り、回復させるための永年の活動が評価されたものである。

▼4月4日～5日 満開の桜に誘われ、大勢の人が来訪。資料館に立ち寄った人は2日間で464人（団体はなし）に達した。

▼4月16日 韓国全羅北道のハンセン病回復者定着村・益山農場から沈田<sup>イクサン</sup>横が、農場長で介助者の金賢<sup>キンヒョンス</sup>沫とともに来館。沈は戦前、日本の教育を受けたために日本語も達者で、『小鹿島半世紀』などの著書もあり、「益山農場の沿革」、「定着村一覧表」などの寄贈を受けた。「資料館はぜひ見たかった」とのことで大変感動していた。全生園で2泊し互助会（韓国・朝鮮人入所者の会）と聖公会のメンバーと歓談、その後神山復生病院を訪問し帰国した。

▼5月2日～6月30日 「栗生楽泉園・星塚敬愛園 思い出の写真展」を、資料館研修展示室で開催。

▼6月20日 午後1時より5時まで、らい予防法廃止記念事業「ハンセン病回復者の国際交流会議」が砂防会館（東京都千代田区）で開催された。主催は全療協、IDEA、藤楓協会、後援は厚生省、笹川記念保健協力財団、朝日新聞東京厚生文化事業団。患者・回復者の国際交流の促進をはかるため、インド、アメリカ、中国、韓国、フィリピン、エチオピア、ブラジルなどから約700人が参集した。会議では、「人間の尊厳回復と共生を目指して」をテーマに、IDEAの代表らが世界のハンセン病対策の現状と将来への期待について協議し、「東京宣言」を採択した。

主催者である全療協・高瀬会長、IDEA・ゴパール会長の挨拶、藤楓協会総裁・寛仁親王殿下のお言葉と小泉純一郎厚生大臣、WHOの中島宏



ハンセン病回復者の国際交流会議

(1) 正式名称は「財団法人日本船舶振興会」。「日本財団」の名称は通称として用いられていたもので、2013年4月1日から「公益財団法人日本財団」が正式名称となる。本稿では全期間を通して「日本財団」と表記する。

## 資料⑨ 東京宣言

1998年6月20日、東京において、日本のらい予防法廃止記念事業として開催された「ハンセン病回復者の国際交流会議」において、ハンセン病患者・回復者及び一般市民は、「人間の尊厳回復と共生をめざして」という主題のもとに意見交換と交流をおこなった。

今日ハンセン病は、有効な治療法の確立により、一般の疾病同様、治癒する病気となった。しかしながら、日本をはじめ世界の各国では、いまだにいわれのない偏見や社会的差別が根強く存在し、人権と尊厳が著しく阻害されているとのハンセン病患者・回復者の証言は何よりも重く受けとめられなければならない。

ハンセン病患者・回復者の辛酸を窮めた永年の闘病生活や社会から排除され、人間としての生存権をも否定された暗い歴史は、再びくり返されてはならない。

現在進められているハンセン病の啓発、患者回復者の経済的自立の促進、差別の撤廃及び社会における共存をめざす活動は、極めて重要であるにも拘わらず、まだ緒についたばかりであることを共通の認識とする必要がある。

今から50年前の1948年12月10日、国際連合第3回総会で採決された世界人権宣言は、「すべての人間は生まれながらにして自由であり、尊厳と権利について平等である。」(第一条)、「権利と自由の享有に関して、いかなる差別もされない権利を有する」(第二条)と宣言した。

我々国際交流会議参加者一同は、世界人権宣言の理念を想起し、ハンセン病患者・回復者を含む全ての人々が平等に権利と機会を享受することをめざして、次に掲げる課題に自ら取り組んでいく決意である。

1. 今回の会議のようなハンセン病患者・回復者と一般市民の交流の機会を拡大し、相互の理解の促進を図ること。
2. ハンセン病患者・回復者が自ら、一般市民としての権利及び責任を自覚し、積極的に社会と関わっていくと同時に、地域社会もかかる努力を受け入れること。
3. 偏見及び、あらゆる社会的差別を解消するために、さまざまな困難に直面しながらも、自らの道を切り拓いてきた勇気ある先達の努力と志を引き継ぎ、発展させるために、病気の体験者自身が重要な役割を担って努力すること。
4. ハンセン病だけでなく、難病を患う人々やさまざまな障害者と連帯し、平等な社会参加の機会の拡大のために、重要な役割を担っていくこと。
5. 各国の政府や非政府団体に対し、ハンセン病患者・回復者の尊厳の尊重と共生への努力を求めると同時に、回復者の尊厳を傷つけるような表現を改めるよう求めていくこと。
6. 世界の人々に、ハンセン病問題に対する理解を促すために、各国のハンセン病の歴史と回復者の体験に学ぶとともに、一層交流を深めること。
7. ハンセン病についても、治療を要する人々がいなくなり、手当を必要とする障害も、克服すべき差別もなくなり、かつてこの病気を体験した人たちが市民として平等の権利と生活空間と義務を享受し、社会に共生できるようになってはじめて、最終的に病気の終息と勝利の宣言をすることができると認識し努力を続けること。

以上、国際交流会議の名において宣言する。

1998年6月20日「ハンセン病回復者の国際交流会議」参加者一同

事務局長の来賓挨拶につづき、福沢美和（ひとみ会）が「盲導犬とともに」をテーマに感動的な講演を行った。テーブル討議では日本を含む8カ国の代表が、熱っぽく自国のハンセン病対策の現状報告や提言を行った。その後、神美知宏（全療協事務局長）が「東京宣言」案を朗読、満場一致で採択された（資料⑨）。栗生楽泉園、全生園、駿河療養所からもバスで入所者や職員が参加して、会場を盛り上げた。

▼7月5日～30日 IDEAの国際交流会議の際、会場の砂防会館で展示された「アイデア展」の写真パネル10数点を、資料館研修展示室で展示する。これは、八重樫信之（朝日新聞社カメラマン）が、世界各国のハンセン病患者・回復者を撮影したものである。

▼7月31日 星塚敬愛園、菊池恵楓園の入所者13人が国を相手取り、らい予防法による基本的人権の侵害に対する賠償を求める訴訟をおこす（以



下、熊本地裁、東京地裁、岡山地裁に提訴された訴訟の総称として「ハンセン病国賠訴訟」と記す)。

▼9月1日～30日 資料館開館5周年記念事業のプレ企画として、「趙昌源絵画と入園者作品展」を資料館研修展示室で開催。

▼9月7日～12日 中国の北京市で「第15回国際ハンセン病学会」が開催された。世界13カ国から多数の回復者が参加したが、日本からは全療協の高瀬会長と神事務局長、また入所者有志12名も参加した。今回は学術会議と並行して回復者自身が主体となった4つの分科会が開催され、社会問題をいかに考え、どう解決してゆくかを真剣に討議した。

▼10月15日～11月29日 資料館開館5周年記念「趙根在(遺作)写真展 ハンセン病の光と影」を、資料館研修展示室で開催(資料⑩)。

▼12月10日 『高松宮記念ハンセン病資料館 開館5周年のあゆみ』を発行。

## 1999(平成11)年

▼1月16日 第53回毎日映画コンクールの各賞が発表された。日本映画大賞は『愛を乞うひと』(東宝、角川書店、サンダンス・カンパニー)であったが、記録文化映画部門では中山映画の長編『見えない壁を越えて』が入賞の荣誉に輝いた。2月8日午後6時から東京・芝公園の東京プリンスホテルで開催された表彰式とレセプションは、超満員の盛況であった。中山映画のスタッフとともに招待を受け、藤楓協会の大谷理事長と資料館から運営委員の大竹と佐川が出席。中山監督が表彰状とブロンズ像を授与された際には、ともに盛んな拍手を送った。

▼1月25日 東京都の青島幸男知事が湖南3市(武蔵村山市、東大和市、東村山市)の都市計画(モノレール、都営住宅など)の視察に訪れ、東村山市役所での意見交換の後、知事、都庁関係者、都議会議員、市長、市議会議員、市職員、報道関係者など50人以上が来館し、午後5時すぎまで見学。

▼5月1日～6月30日 「写真展・沖縄二園の今昔」を、資料館研修展示室で開催。本土とは一風

変わった写真があり、来館者は熱心に見入っていた。

▼6月17日 ハンセン病国賠訴訟の第4回口頭弁論が熊本地裁で行われる。この時点で原告は西日本9園149人、東日本4園21人、計170人。一方原告を支援する全国10市民団体が、この日熊本市内で会合を開き、「ハンセン病国賠訴訟支援全国連絡会」を結成した。

▼6月26日 資料館開館6周年記念「趙昌源講演会 国立<sup>ソロクト</sup>小鹿島病院の思い出と韓国のハンセン病事情」を、資料館ビデオホールで開催。講演で趙は、当時小鹿島病院には5千人の入院者がいたが多くは退院し、退院者は定着村に移住して養豚、養鶏などの事業に成功したこと、全員クリスチャンで韓星共同会のもと団結も強く悪いことをする人はいないことなどを述べた。会場には園内と都内をはじめ、茨城、埼玉、千葉、兵庫から80人以上が集まり、熱心に聞き入っていた。講演後、参加者から質問、意見、感想なども述べられた。

▼8月27日 ハンセン病国賠訴訟の第5回口頭弁論が熊本地裁で行われ、大谷藤郎(資料館館長)が出廷し、午前は国側(被告)、午後は原告側の証人に立った。大谷証人は終始落ちついた様子で自身の厚生省在籍時代にふれて、「自分は患者のことを考えていたつもりだったが小手先のことで、人権の視点では問題があった」と述べた。また、予防法については「新法、旧法とも誤りで、民族浄化の下、社会全体から患者を葬り去る隔離政策で、医学的な面からも根拠のないものだった」と、信念にもとづいて証言した。法廷には九州ほか関東、関西、中国、四国など各地から集まった100人余りの傍聴者や被告(国側)の代理人、弁護士40人、報道陣などでぎっしりと埋まり緊張感がただよっていたが、大谷証言を聞くと「おおうっ」という安堵したようななどよめきを感じた。

▼10月2日～11月17日 「陶芸展・全生焼&写真展・全生園の森」を、資料館研修展示室で開催。

▼11月29日 資料館語り部の平沢保治が、英国救らいミッションよりウェルズリー・ペイリー賞を受賞することとなり、この日、インドのデリーにて授賞式が行われた。「ハンセン病患者・回復者

#### 資料⑩ ハンセン病の光と影 趙根在（遺作）写真展

北は松丘保養園から南は星塚敬愛園まで、かつて療養所を訪ね、それぞれに通いつめ、各園の習俗に首までつきながら療友たちの生きざまや、隔離撲滅を国是とした時代の名残りの諸物を写真に撮り続けたカメラマンの村井金一（趙根在）さんが昨年、やりかけの仕事と最愛の奥さんを残して浦和で亡くなった。

両手共指の全くない手に念珠を掛けての「納棺」からはじまる「決別」「出棺」「火葬場」「納骨堂内部」等、すでに栗生楽泉園療友の筈雄二さんの誌とドッキングして出版された「ライは長い旅だから」や雑誌に発表されたものもあるが、「外科手術」「手の整形」「パラピン浴」「立てた。歩けた」「歩行訓練」等、どれを見てもいちいち感動させられるし、凍った糞尿を砕いて箱に積み、ソリに綱をつけて運ぶ「汲取り作業」をはじめ、松丘の壮絶な雪との闘いはただ「凄い」としかいえない。

村井さんが遺した写真はネガで二万枚以上、今となっては、何れも貴重な資料というより、ハンセン病療養所の歴史そのものといってもよく、ハンセン病資料館では奥さんの理解を得、十月十五日から十一月二十九日まで、その中から百点を選んで写真展を開館五周年記念として開催することになった。

従来、資料館では、偏見を助長する恐れがあるという考えから、余り後遺症の目立つ写真の展示は避けてきたが、今回は違う。なぜか。村井カメラマンの作風でもあるが、彼の写真は、障害を隠して卑屈になるな、といっているように思える。即ち、人間は不自由さや変形を努力や工夫で乗り越える時が最も美しいし、あるがままにあり、そのうえで正しい理解を持って貰うことが本当ではないか、そういう時代がとっくにきているのだ、と。

愛生園盲人会「青い鳥」楽団の伴奏による紅白歌合戦や、保養園の楓楽団が地域の老人ホームを慰問している情景など、カラオケ以前の懐かしさというより、掛け替えのない写真というべきだろうか。口で字を書く人や点字を舌で読む人、焼けどをしないようにピンセットで煙草を喫う人、消毒やゴミ集め、バキューム、樋屋、養豚、お茶刈り、綿打ち、木炭運び等、各種作業および楽泉園の超珍しい写真の「杖供養」を含め、カメラマンがかつて精魂を傾けた瞬間が、一枚一枚の一人一人が、改めて今、光り輝いている。

※『資料館だより』第21号（1998年10月1日）より

の人権回復運動や障害者支援運動などに取り組み、ハンセン病回復者の『尊厳』をテーマとし、幅広い人々を対象に講演活動を行っていること」が評価されたもの。

### 2000（平成12）年

▼1月11日～20日 「芦村カズヨ絵画展」を、資料館研修展示室で開催。芦村は全生園の元婦長。

▼2月1日～3月16日 「写真展「駿河療養所」&写生画「東村山三十景展」」を開催。

▼2月26日 「ハンセン病関係者連絡懇話会」の第1回が厚生省で開催される。療養所の将来構想を検討する基礎資料をつくるため、関係者が集まり各園の状況や入所者の意見等に関する情報交換を行う場として設置されたもの。事務局は厚生省の保健医療局エイズ疾病対策課と、国立病院部政策医療課に置かれる。国立13園の園長・自治会長、全療協本部2名をはじめ、30名以上が出席した。

▼5月9日 東京地裁の大法廷でハンセン病国賠

訴訟の第6回口頭弁論が行われた。この日は原告側の申請にもとづいて、成田稔（多磨全生園名誉園長、資料館運営委員長）が証人に立った。成田は、らい予防法にもとづく療養所と隔離政策そのものに多くの問題があったこと、国の恐怖宣伝によって患者があぶり出され、終生の隔離を余儀なくされたことや、患者無視、人間不在の園内強制労働などを批判した。さらにその責任は国や日本らい学会にあったことを、隔離政策の一端を担ってきた自分自身の反省とともに明確に証言された。また、6月6日にも同法廷で成田が、今度は国側の証人として反対尋問に立ったが、終始人道的な立場から、ハンセン病政策、療養所運営の実態を証言した。

▼5月2日～6月29日 東北新生園と奄美和光園の写真展「思い出の東北・奄美写真展」を、資料館研修展示室で開催。開館1年目の1994（平成6）年より、毎年2園ずつ開催した各園の写真展の最後を飾るもの。

▼6月25日 資料館1階西側に設置してあった母



娘遍路像を、玄関外西側へ移設した。これは室内ロビーが手狭になったことと、以前から「表に出したら」との要望があり、それに応じたものである。

▼6月23日 日本財団の笹川陽平理事長が、幹部数名とともに来館。大谷館長、資料館運営委員から資料館の現状を説明するとともに、「資料の保存、閲覧、展示等、いずれも手狭で増築が必要だが予算面で困っている。ぜひご援助をお願いしたい」と要望。笹川理事長は幹部に「検討するように」との指示を与え、「ハンセン病資料保存検討委員会」が発足する運びとなる。

▼7月7日 日本財団ビル（東京都港区）4階会議室において、第1回ハンセン病資料保存検討委員会が開催される。今後の課題として、設備の拡充、国内のみならず世界的な視野での資料の収集、整理、保存、展示、閲覧方法などが検討された。委員は資料館の大谷館長を委員長として、西沢、森田、黒沢、山口（以上、日本財団）、紀伊國、山口、鈴木（以上、笹川記念保健協力財団）、神（全療協事務局長）、大和田（藤楓協会）、平沢、佐川（以上、資料館運営委員）の12名である。

▼10月1日～11月30日 資料館開館7周年記念企画「長島愛生園展」を、愛生園自治会後援で開催する。会場は資料館研修展示室。写真、陶芸、彫刻、掛軸、絵画、新良田教室関係資料など60数点を展示した。

## 2001（平成13）年

▼3月12日 日本共産党の国会議員らが全生園と資料館を視察。

▼3月13日 民主党の国会議員らが全生園と資料館を視察。

▼3月24日 連続学習会「「らい予防法」とはなにか？—法律と市民社会—」の第1回学習会を、資料館ビデオホールで開催。講師は石埼学（亜細亜大学・憲法学）で、「文化国家、憲法、らい者」をテーマに①日本国憲法下でなぜ患者の隔離・撲滅政策が強化されたのか、②なぜ憲法学者は優生保護法、らい予防法を憲法違反だと批判できなかったか、について時代背景や具体例を示しながら

ら80分間熱っぽく話された。その後、質疑応答を行う。参加者は67人。

▼4月6日～8日 日本皮膚科学会が第100回記念総会を京王プラザホテル（東京都新宿区）で開催。総会の期間中、同じ会場で記念事業「特別展示・先人たちの足跡」が開催され、そのなかで「ハンセン病展」が行われた。プロミン注射、子供の入所者によるガーゼのばしの写真、園内通用券、身元調べ綴、大風子油注射器セット、北條民雄全集、川端康成より北條民雄への手紙などが展示された。

▼4月14日 「ハンセン病違憲国家賠償訴訟全国原告団協議会」（以下、全原協）が結成される。

▼4月16日 前年7月に発足したハンセン病資料保存検討委員会を発展的に解消し、新たに「ハンセン病資料館新館建設委員会」が設立され、資料館で第1回会合を開催。財団法人日本科学技術振興財団が設計した3つの設計図について検討したが、持ち越して再検討することとなった。

▼4月21日 連続学習会「「らい予防法」とはなにか？」の第2回学習会を、資料館ビデオホールで開催。講師は、ハンセン病国賠訴訟東京弁護士団弁護士の竹内英一郎。竹内は司法の立場から、らい予防法の憲法適合性、ハンセン病の実態、らい予防法が社会に与えたもの、廃止の理由、国の責任などを憲法の各条と照合しながら解説された。らい予防法が強制終身隔離と患者撲滅政策であり、強制収容、消毒、強制労働、作業、断種、墮胎の実態、懲戒検束、プライバシーの抹殺など、いずれも憲法違反であり国民に与えた偏見・差別の影響は根深いものがある。国の責任は明らか



熊本地裁判決（赤旗編集局提供）

で、謝罪と賠償を求め、啓発活動をつづけるべきであると熱っぽく話された。

▼5月11日 熊本地裁でハンセン病国賠訴訟第1次から4次までの原告127人に対し、裁判長は国の憲法違反、人権無視の誤った政策を全面的に認め「遅くとも昭和35年以降、らい予防法の隔離の違憲性は明白だ」とし、1人800万円から1,400万円までの4段階の賠償を命じた。さらに国会に対しても立法不作為の責任を認め、原告の全面的な勝利となった。その後原告団、弁護士、全療協代表、支援グループらは政府の控訴断念を求める活動を関係者に積極的に行った。

▼5月16日 WHOの第54回総会において、日本財団の笹川陽平理事長が初代の「ハンセン病制圧特別大使」に任命された。日本財団は笹川記念保健協力財団と協力し、過去30年にわたりWHOのハンセン病制圧プログラムに参加、世界116カ国において1万人に1人以下の患者数にすることに成功している。各国で使用しているハンセン病の治療薬を、1995（平成3）年からは全て日本財団が提供しているなどの活動が評価されたもの。

▼5月23日 政府はハンセン病国賠訴訟の控訴を断念。小泉純一郎総理大臣が直接「国の責任を認めるとともに、問題の早期解決を図るため判決を重く受け止め、極めて異例なことだが控訴しないことにした」と述べた。その後、原告団、弁護士、全療協はそれぞれ声明を発表、早期に全面解決を図るよう要求するとともに、国会議員に要請を行った。国会では6月7日に衆議院、同8日に参議院で「ハンセン病問題に関する決議」が全会一致で採択された。

政府は異例の早さでハンセン病の回復者、退所者など5,500人を対象とした「ハンセン病補償法案」を作成、衆議院（11日）、参議院（15日）において可決された（「ハンセン病療養所入所者等に対する補償金の支給等に関する法律」。以下、ハンセン病補償法）。熊本地裁の判決が、このようにハンセン病問題全面解決の糸口をつけたことは高く評価されるが、同時に、マスコミが連日大きく取り上げ、支援者がふえ、世論が大きく盛り上がったことも忘れてはならないだろう。

1953（昭和28）年のらい予防法闘争の際は支援

者もほとんどなく、マスコミも取り上げないなかで、国会裏、厚生省で延15日も座り込みをつづけた各園代表たちにとっては、社会的背景の違いはあるものの、人権問題に対する国民の意識の変化に感無量である。

▼5月26日 連続学習会「「らい予防法」とはなにか？」の第3回（最終回）を、資料館ビデオホールで開催。講師は神美知宏（全療協事務局長）。ハンセン病国賠訴訟関係のニュースが連日流れ、市民の関心も高く資料館には連日問い合わせがあった。当日の入館者は214人で、学習会会場には通路までぎっしり140人が参加した。

神は静かな口調で、予防法が自分や家族に与えた影響、発病と入園、自治会活動、全療協事務局長として予防法廃止に取り組んだこと、さらにハンセン病国賠訴訟熊本地裁判決の後に控訴断念を求めて大物政治家への働きかけをした裏話、予防法廃止後に本名に戻りそれが新聞に出た朝母親が亡くなったことなどを淡々と語り、参加者に深い感銘を与えた。その後4時半まで質疑応答があり、盛会裡に終了した。

参加者のなかには「3回とも参加したが、憲法上、司法上、体験上とそれぞれの角度からの検証で、質の高い学習会だった。周りの差別意識に流される危険性をあらためて感じた」との発言もあった。

▼6月29日 厚生労働省と統一交渉団とが、ハンセン病問題の全面解決に向けた施策を検討する「ハンセン病問題対策協議会」の第1回が、厚生労働省にて開催される。座長は厚生労働副大臣で、協議事項は謝罪・名誉回復、社会復帰、在園保障、真相究明など。統一交渉団は全原協、ハンセン病違憲国家賠償訴訟全国弁護士連絡会（以下、全弁連）、全療協で構成。

▼7月1日 資料館8周年記念として、哲学者の鶴見俊輔による講演会「ハンセン病との出逢いから」を開催した。会場は全生園コミュニティセンター。当日は地元や近隣地域をはじめ、福島、栃木、岐阜、和歌山、佐賀、熊本など遠方からの参加者も多く、会場は420人を超す満員の盛況であった。

鶴見は「私とハンセン病との出逢いは終戦後、



東京でロシア（米国籍）の一少年の通訳をしてあげることからはじまった」と語る。その後その少年（トロチェフ）が叔母と栗生楽泉園に入園。鶴見が楽泉園を訪れ交際するなかで矢嶋良一園長や大江満雄（詩人）、入園者の筈雄二、島田等（長島愛生園）、志木逸馬（全生園）などとも知り合いになったことを、終始ユーモアを交えて語り、会場の人たちに感銘を与えた。

▼7月5日 明石海人生誕百年を記念して、静岡県立沼津商業高等学校（明石の母校）同窓会が建立した歌碑の除幕式が、沼津千本浜公園で盛大に開催され、資料館からも2名が参加した。歌碑は沼津商高内にも建てられ、同日除幕式が行われた。

▼7月24日 熊本地裁判決確定後、原告団の要望を受け入れ坂口力厚生労働大臣と南野知恵子<sup>のおの</sup>同副大臣が各療養所への謝罪訪問をつづけてきたが、最終回のこの日、全生園と資料館を訪れた。

また、これにあわせるように各都道府県の知事からも謝罪訪問に回ったが、全生園と資料館には、茨城県、静岡県、高知県、熊本県、沖縄県の知事と、宮城県、福島県、千葉県、東京都、長野県、愛知県、岐阜県、和歌山県、福岡県、長崎県、宮崎県などの関係部課長が来訪した。

▼8月20日～24日 第24回ハンセン病医学夏期大学講座が、ハンセン病研究センター、多磨全生園研修棟を会場として開催。参加者62人。

▼10月16日～11月18日 企画展「菊池恵楓園展」を、資料館研修展示室で開催。パネル写真45点のほか、絵画、書籍など資料多数。期間中の入館者1,996人。

▼11月15日 全療協結成50周年を記念して作成された『復権への日月』（光陽出版社）出版記念集会在、椿山荘（東京都文京区）で開催された。全療協本部、各支部代表のほか、来賓として厚生労働省、所長連盟、ハンセン病国賠訴訟弁護団、支援団体、友好団体などの関係者178人が参加した。

第一部の記念集会では全療協の高瀬重二郎会長が式辞を述べ、つづいて梶屋敬悟（厚生労働副大臣）、大谷藤郎（藤楓協会理事長）、津島雄二（衆議院議員、ハンセン病対策議員懇談会〔以下、対策議懇〕副会長）、細渕一男（市町連絡協議会会

長）、豊田誠（東日本弁護団代表）らが次々と祝辞を述べた。全療協運動史『復権への日月』の出版にあたっては、高瀬会長より出版の労をねぎらう挨拶があり、つづいて各編集委員に感謝状と記念品が贈呈された。

大竹章編集委員長は「昭和26年より51年まで25年間の記録は、すでに『全療協運動史』として出されており、『復権への日月』はその後の運動史である。前半はらい予防法、生活改善、後半は人権回復の闘いが主題となっている」と述べ、編集期間中のエピソードを語った。

第二部は「父を語る」と題して、林力（元九州産業大学教授）を講師として記念講演会が行われた。第三部は懇親会が行われた。

▼12月25日 第5回ハンセン病問題対策協議会が弘済会館（東京都千代田区）で開催される。「謝罪・名誉回復」、「在園保障」、「社会復帰・社会生活支援」、「真相究明等」、「今後の協議」について厚生労働省と統一交渉団との間で合意に達し、確認書への調印とその交換が行われた。

## 2002（平成14）年

▼1月28日 療養所入所歴のない回復者と、ハンセン病国賠訴訟提訴前に死亡した回復者の遺族に対する補償にかかる和解のための基本合意書に、原告団と坂口力厚生労働大臣が調印。30日に和解が成立する。

▼2月15日 2001年度の朝日社会福祉賞に、「ユニセフ親善大使」として活躍している黒柳徹子とともに、全療協が選ばれた。「ハンセン病に対する偏見、差別と闘い、人間の尊厳を広く社会に示した功績」が評価された。

この日、全療協からは高瀬前会長を含む本部員と代表者会議のため上京してきた各支部代表が、中央区の朝日新聞東京本社レセプションルームでの授賞式に参加。箱島信一社長から正賞のブロンズ像と副賞（200万円）を贈呈された。その後黒柳と伊藤文男会長が、受賞のお礼と抱負、決意を語ったが、そのなかで「悲願の復権を果し、国の犯した罪と責任は白日の下にさらされたが、闘いは終わったわけではない。全面解決を実現させ、難病患者や障害者など共通の問題を抱える人たちと

連帯していきたい」と述べたのが印象的であった。なお、副賞の200万円は難病の子供たちを支援する「ピーターパンこども基金」に譲金することを、午前の代表者会議ですでに決めていた。

▼3月23日 全国主要50新聞社の朝刊に、前年12月のハンセン病問題対策協議会で合意した国の謝罪広告が一斉に掲載された。謝罪広告は新聞半ページにおよぶもので、ハンセン病患者・回復者の名誉回復をはかるのが目的。坂口厚生労働大臣による「ハンセン病患者・元患者の方々へ心より謝罪いたします」と題する談話、衆参両院での「ハンセン病問題に関する決議」、控訴断念の際の小泉総理大臣による「ハンセン病問題の早期かつ全面解決に向けての内閣総理大臣談話」が掲載された。

▼3月29日 東京都産業労働会館（台東区）の開鎖（2001年12月）を受けこの年1月に設立された東京都人権プラザで、「クローズアップ人権」をテーマに、各種の展示が公開された。ハンセン病のコーナーでは、資料館より貸し出した全生園のパネル12点、全生園全体の航空写真、園内通用券（紙幣・硬貨）、「見張所勤務日誌」、「逃走患者名簿」などが展示され、見学者の注目を集めた。

▼5月1日 開館9年目にして待望の学芸員稲葉上道<sup>たかみち</sup>が配属される。同じく6月には西浦直子が配属される。2人とも東京学芸大学大学院出身で経験豊富。早速書籍のデータベース化、企画展、シンポジウムの計画や、展示、写真整理など山積した仕事に取り組んでもらう。

▼5月5日～8日 日本財団の笹川陽平理事長、笹川記念保健協力財団の紀伊國献三理事長、同山口和子理事ほか2名に同行して、全生園から平沢保治、佐川修、千葉叶（付添）、大島青松園から曾我野一美が、韓国ハンセン病回復者施設を訪問した。6日午前協同産業（貸ビル、企業150社が入居）と家具センター（製造販売）がある、活気あふれる定着村を訪問。午後はハンセン病研究所<sup>ソロクト</sup>を訪問した。7日は小鹿島病院（全羅南道、入所者800人）を訪問。病院内や赤レンガづくりの資料館二棟や、監禁所、納骨堂などを見学した。

▼5月23日 赤坂プリンスホテル（東京都千代田区）で17時30分より全原協、全弁連、全療協、ハ

ンセン病問題の最終解決を進める国会議員懇談会（会長は江田五月参議院議員。以下、最終解決議懇）主催による「訴訟勝利確定一周年の集い」が開催された。

一部の追悼式には原告、支援者、全療協、弁護団、政府関係者、国会議員など50人が参加。予防法廃止や裁判の勝利判決を聞くことなく死亡された2万4千人近い先輩諸霊に黙祷が捧げられた。つづいて曾我野一美（全原協会長）、伊藤文男（全療協会長）、豊田誠（全弁連）、坂口力（厚生労働大臣）、森山真弓（法務大臣）、井上慎三（所長連盟会長）が次々と追悼の言葉を述べた。曾我野は「刑務所同様の仕打ちのなかで、判決を知ることなく死んでいった友人、先輩はどれほど無念だったかと思うと体のふるえが止まらない。一人ひとりに哀悼の意を表したい」と述べた。その後、各団体代表、政府関係者、各政党党首らが献花を行い一部を終えた。

二部のレセプションは場所を変えて行われたが、最終解決議懇の江田五月会長による共催者挨拶と、宮路和明厚生労働副大臣の挨拶の後、乾杯と懇談に移った。

▼5月27日 「ハンセン病資料館施設整備等検討懇談会」の第1回が、厚生労働省で開催される。前年5月の熊本地裁判決後、小泉総理大臣が控訴断念の談話のなかで「ハンセン病資料館の充実を…」と述べたことと、ハンセン病問題対策協議会での協議をふまえたもの。



ハンセン病資料館施設整備等検討懇談会

資料館の増設、拡充の要請は数年前から出されていた。増えつづける書籍や資料が箱詰め状態で保存され展示に対応できていないこと、大人数の



団体の場合はビデオ視聴や講演の部屋が狭いこと、企画展も手狭で思うような展示ができないことなどの不満があった。

そのため藤楓協会は日本財団からの支援を得て、現資料館の隣接地に新館建設を計画、日本科学技術振興財団が施設基本構想をまとめ、2001（平成13）年度には基本設計に移行する予定であった。しかし、小泉談話の後に状況が一変、日本財団は新館建設から手を引いてしまった。その後、全原協と全弁連は、資料館の拡充や職員増員などを坂口厚生労働大臣に要求。また長島愛生園の資料館に関しても、旧本館への移転、組織の確立、拡充、運営等について、あわせて要求を行った。

▼6月10日 ハンセン病資料館施設整備等検討懇談会の第2回が、厚生労働省で開催される。熊本県の中村義彦健康福祉部長、合志町長代理、太田明菊池恵楓園自治会長らが出席して「恵楓園にも資料館を建設してほしい」との要請を行った。

▼6月24日 ハンセン病資料館施設整備等検討懇談会の第3回が、東京都千代田区の法曹会館で開催される。岡山県の本田茂伸副知事、筆保博文邑久町助役、日野三郎長島愛生園自治会長が出席し、愛生園内への資料館設置の要請を行った。

懇談会事務局は「資料館をどこに建てるかは行政で決める。懇談会では①運営形態、②資料館の機能と立地条件、③資料の把握、④資料の整理、保存、展示方法、⑤資料館の規模と体制、⑥建造物の実物等、資料館保存資料以外の取扱いなどを検討してほしい」と述べる。さらに、「2003（平成15）年度は調査費、2004（平成16）年度で建築予算を要求する」と説明したが、これをめぐって会議が紛糾。「2003年度予算で建設を」の問題は決着がつかず、次回へ持ち越しされた。

▼7月6日 資料館開館9周年記念事業として、アニメ映画『千と千尋の神隠し』の上映会を全生園コミュニティセンターにて行う。宮崎駿監督と東宝映画の協力を得て、2回上映。

▼7月28日 竹村栄一（邑久光明園入所者、当時76歳）の半生を綴るハンセン病創作劇「生きていま」が、故郷である小浜市文化会館（福井県）で上演され、1,000人の観客に感動を与えた。

▼8月7日～12日 東京都庁第一本庁舎南展望室において、「人権啓発パネル展」が東京都人権啓発活動ネットワーク協議会主催で開催された。世界人権宣言パネルや、資料館より貸し出した啓発写真パネル、園内通用券などのほか、中学生人権作文コンクール・東京都大会優秀作品、メッセージ、リーフレットなどもおかれ、期間中21,642人の来場者があった。なお同人権パネル展は、10月1日から7日まで、新宿西口広場・イベントコーナーでも開催された。

▼8月18日～11月17日 名誉町民小川正子女史生誕100周年記念・春日居町郷土館開館10周年記念の特別企画展「『悲しき病世に無からしめ』—ハンセン病患者救済に尽くした女医小川正子の生涯—」が、小川正子記念館（春日居町郷土館に併設）で開催された。

▼8月27日～9月1日 東京写真文化館（東京都港区）5階ギャラリーで趙根在写真展「ハンセン病を撮り続けて」が開催された。資料館より貸し出した35点のパネルは、ハンセン病の歴史を語る貴重なものである。9月1日には写真集『趙根在写真集 ハンセン病を撮り続けて』（草風館）も発行された。

▼9月19日 あと5人で10万人目の入館者が決まるこの日、日立看護専門学校の生徒一同が、まとめて入館してきたので個人の指定ができず、同校一行を10万人目の入館者とし、成田運営委員長より花束と記念品を贈った。

▼10月1日～11月30日 資料館開館9周年記念「邑久光明園展」を開催した。自治会作成の写真パネル58点、写真クラブ作成パネル12点のほか、書、陶芸、手芸など、たくさんの展示品を来館者は食い入るように見ていた。期間中光明園より25人がバスで見学に訪れた。なお、展示終了後、書道2点、陶芸15点、手芸79点が資料館に寄贈された。

▼10月3日 栗生楽泉園入所者の浅井あい（当時83歳・盲人）が、67年ぶりに故郷の石川県金沢市に帰り、卒業証書を授与された際の報道写真23枚を資料館で展示する。この写真は、「ふる里にハンセン病元患者の方々を温かく迎える会」の杉浦常男会長と支援グループのご配慮で、資料館に寄

贈して頂いたもの。

▼10月16日 国の隔離政策の実態、真相を究明する第三者機関「ハンセン病問題に関する検証会議」（以下、検証会議。座長・金平輝子元東京都副知事）が厚生労働省の委託により日本弁護士連合会法務研究財団に設置され、この日、第1回検討会および第1回検証会議・第2回検討会合同会議を行う。委員は回復者、弁護士、療養所代表、学識経験者、マスコミ関係者ら。

▼11月26日～27日 第3回検証会議として、検証会議のメンバーが大島青松園で初の聞き取り調査および園内見学を行った。

▼11月29日 「学ぼう・生かそう・広げよう地域の宝～全生園の学習を通して～」をテーマに、東村山市立青葉小学校児童による研究発表会が、全生園コミュニティセンターで行われた。同校では、1994（平成6）年から児童が資料館や全生園を訪れ、園内の樹木や草花にふれ、施設、史跡建造物、歴史を調べ、入所者から話を聞き人権の大切さや生命の尊さを学ぶなどの学習を重ねてきた。

入口ロビーには写真や調査の成果がぎっしりと展示されており、会場内の6カ所のコーナーではテーマ別に展示された手書きのパネルや写真などの説明を子供たちが行い、保護者、市民、入所者、他の小学校の生徒たちからも「よく勉強しているなあ」と感嘆の声があがった。

また、午後2時半頃からは「全生園の学習、その取り組みと成果」をテーマにしたシンポジウム、4時からは大谷館長の特別講演「人権教育を考える―ハンセン病問題を学ぶこと」も行われ、大盛況であった。

▼11月 菊池恵楓園入所者が予約した熊本県内の温泉ホテルから宿泊を拒否される。ホテル側は熊本県や関係者の抗議を受け謝罪したが、その後各方面から同園自治会に対する誹謗、中傷が殺到し社会問題化した。

▼この年、人権関係の催しでハンセン病問題を取り上げた企画が各地で開催される。「菊池恵楓園資料展」（熊本県合志町歴史資料館、11月2日～24日）、「ハンセン病とわたしたち～人間回復を求めて」（福岡県人権啓発情報センター、12月1日

～3月4日）、「熊本のハンセン病関係資料展」（熊本県八千代市立未来の森ミュージアム、12月3日～15日）など。

## 2003（平成15）年

▼3月10日～15日 日本財団と笹川記念保健協力財団のお世話で、中国（広州、桂林）への交流の旅が実施された。参加者は全生園、駿河療養所、退所者など成田空港組15名と、大島青松園、菊池恵楓園、星塚敬愛園など関西空港組10名で、受け入れ先は漢達康福協会（IDEAの中国支部）である。

11日午前、広東商学院において「差別を取り除き美しい明日を創ろう！」をテーマとして開催された、「第5回国際尊厳の日」の集いに参加。参加者は200人余り。式典後半には日本参加者代表・曾我野一美、日本財団の黒沢司課長も挨拶を行い、英語、日本語、中国語の通訳で紹介された。

午後は日本からの参加者は2班に分かれ、大和村と馬州村、翌12日も2班に分かれ、康楽村と楊抗村を訪問した。

▼2月24日～26日 資料館の稲葉、西浦両学芸員と佐川運営委員が、長島愛生園の恩賜記念館、大阪の人権博物館、奈良の水平社博物館を見学した。長島では宇佐美治の説明で記念館の展示品を見学、大阪では村上紀夫学芸員の案内で企画展「ハンセン病者の闘い―隔離・地域社会・医療―」を見学した。水平社博物館では仲林弘次の案内で、水平社運動の歴史展と、企画展「ハンセン病差別と隔離の90年」を見学したが、映像設備が素晴らしかった

▼3月31日 藤楓協会は、1952（昭和27）年6月13日に癩予防協会から改称し、救らい事業を推進してきたが、初代総裁・高松宮宣仁親王殿下がかねてより「50周年を期して解散するように」とのご指示を表明されていたことを受け、3月31日付で解散。4月1日から「社会福祉法人ふれあい福祉協会」として再発足することになった。

▼6月1日～7月31日 資料館開館10周年記念の一環として、企画展「松丘保養園展」を資料館研修展示室で開催。写真、絵画、書、陶芸、個人



出版物、機関誌、園内通用銭、鉄びんなど盛りだくさん。

▼6月28日 資料館開館10周年記念行事として、全生園コミュニティセンターにおいて、午後1時より大谷館長の記念講演「近代の論理とハンセン病」を開催。その後、京楽座中西和久ひとり芝居「をぐり考」を上演した。

▼7月15日 厚生労働省において第8回ハンセン病資料館施設整備等検討懇談会が開催され、資料、用地調査の概要が報告された。その後、基本計画策定委員会設置の話があり、午後3時から第1回会合が行われ、策定委員会の下に展示計画作業班と施設整備作業班をつくり、機能分担、調査内容、今後の進め方を討議した。

基本計画策定委員は以下のとおり。藤岡洋保（委員長、東京工業大学大学院理工学研究科教授）、大塚和義（国立民族学博物館民族文化研究部教授）、神美知宏（全療協事務局長）、鈴木真理（東京大学大学院教育学研究科助教授）、武田昭子（昭和女子大学人間文化学部教授）、成田稔（資料館運営委員長）、山口和子（笹川記念保健協力財団理事）、佐川修（資料館運営委員）。

専従作業員は西浦直子、稲葉上道（ともに資料館学芸員）。事務局は厚生労働省担当官と丹青社（管理技術者、主任技術者）。

▼8月8日 長島愛生園の史跡建造物である旧事務本館が、内部を一部改修して「長島愛生園歴史館」として新たなスタートを切った。1階中廊下右側に応接室、園長室、映像展示室、倉庫などがあり、左側は受付談話室、ギャラリー、陶芸展示室、突当たりの大部屋が常設展示室となっている。2階はミーティングルーム、図書室、企画展示室などだが、室内はきれいに改修され見やすい展示となった。

▼9月3日 2003年度新聞協会賞に熊本日日新聞連載の「検証・ハンセン病史」ほか2件が選ばれた。受賞の理由は2001年12月から2003年6月まで6部・84回にわたり連載、菊池恵楓園をはじめ、全国のハンセン病療養所入所者などを取材し、国の隔離政策による人権侵害の実態を明らかにしたことが、高く評価されたものである。

▼9月17日 第12回検証会議が、全生園で開催さ

れる。金平輝子座長ほか16名の委員と各地から参集した原告団、弁護団、全療協関係者、支援グループなど40名の一行が、午前9時30分納骨堂を参拝し、その後資料館、園内を見学。午後1時30分よりコミュニティセンターで、金子保志と芝田チエ（ともに全生園入所者）の聞き取りが行われた。2人からは、強制収容、園内生活、作業の実態などがリアルに述べられ、200人を超える傍聴者は胸の痛む思いであった。

▼10月4日～12月3日 資料館開館10周年記念の一環として、「松丘保養園展」につづく企画展「多磨全生園展」を、資料館研修展示室で開催した。内容は1951（昭和26）年から1961（昭和36）年頃までの、らい予防法闘争、園内作業、礼拝堂、宗教、趣味団体、消防活動、少年少女舎、学園などの写真63点、その他10点の写真、諸々の物品、書類など合計300点におよび、来館者の注目を集めた。

▼10月25日～11月22日 昭和女子大学光葉博物館で、平成15年度秋の特別展「モノ」が語りかけるハンセン病問題」が開催される。充実した内容で、期間中に講演会も行われた。

▼11月17日 1928（昭和3）年に全生病院（現全生園）の入所者によって建築され、1977（昭和52）年まで使用されていた、木造平屋建て12畳室の男子独身軽症者寮「山吹舎」が復元され、東村山市をはじめ多くの関係者を迎え落成式が行われた。老朽化した史跡建造物を復元し、周辺の緑とともに記念公園として全生園を保存する「人権の森構想」の一環として、山吹舎が手はじめに復元されたもの。アニメ映画の宮崎駿監督をはじめ、入所者、市民など多くの協力者による3,500万円の募金によって完成した。

山吹舎は多いときは1部屋8人が共同生活をしていたが、はじめ廊下には雨戸しかなく、冬は室内で薪を燃やしてお湯を沸かしたり暖をとったりした。春先は砂あらしで部屋も廊下も靴跡がつくほど真っ白になった。

▼12月18日 東京都人権啓発センターが、第5回都民講座特別企画としてハンセン病をテーマに、映画『風の舞』の上映と同作品の宮崎信恵監督による講演会を開催する。会場は江戸東京博物館。

映画『風の舞』は大島青松園で詩人として活動していた塔和子の作品づくりを通じ、ハンセン病の歴史と療養生活を映画化したドキュメント作品で、国際女性映画週間（第16回東京国際映画祭協賛企画）にも出品している。

▼12月25日 韓国ソロクトの小鹿島病院に入所している回復者28人が、戦前の日本統治下で強制隔離政策による人権侵害を受けたとして、ハンセン病補償法にもとづく補償請求を厚生労働省に行う。

## 2004（平成16）年

▼2月22日～3月27日 資料館研修展示室で「大分発ハンセン病パネル展 伝えたい 過去を今を これからの」が開催される。主催は「ハンセン病回復者とふるさとを結ぶHP作成委員会」（大分を拠点とする有志グループ）。展示されたパネルは60点。内容はハンセン病の医学的・歴史的な基礎情報とハンセン病国賠訴訟に関する情報、国のハンセン病政策、入所者の運動などである。

▼3月15日 森英介厚生労働副大臣が健康局疾病対策課の藤井課長、橋場課長補佐、医療指導課の鈴木課長、前田課長補佐らをともない全生園と資料館を視察。森副大臣はハンセン病問題対策協議会座長の立場から、統一交渉団との交渉を前に、ハンセン病の歴史と現状への知識と理解を深めることが目的。

▼3月20日 東京都千代田区の弁護士会館で、シンポジウム「ハンセン病に対する偏見・差別の根絶を求めて」が開催された。前半は馬場啓（弁護士）、太田明（菊池恵楓園自治会長）、内田博文（九州大学大学院法学研究院教授）、今本みゆき（熊本県菊鹿中学校教諭）、矢野裕子（同校卒業生）が報告を行った。

宿泊拒否事件に関し、ホテルの最初の謝罪の実情が正確かつ詳細に報道されず、謝罪を拒否した自治会宛に誹謗、中傷が殺到し、入所者が二次被害に苦しんでいること。同情の裏返しの差別が横行し日常化していること。熊本県菊鹿中学校での人権文化の創造を目指す取り組みなどが報告された。その後パネルディスカッションとフロアからの発言、質疑応答があり閉幕した。

▼6月22日 経済産業省第825会議室において、

第12回ハンセン病資料館施設整備等検討懇談会が開催された。全国国立ハンセン病療養所施設長協議会（2003年所長連盟から改称。以下、施設長協議会）より福西征子松丘保養園長、ふれあい福祉協会より北川定謙理事長が新たに懇談会に加わり、懇談会メンバーは12名となった。

▼8月16日 厚生労働省は、国外の療養所入所者はハンセン病補償法の対象外との理由で、小鹿島病院入所者からの補償請求を不支給処分とする。

▼8月23日 小鹿島病院入所者111人が、不支給処分の取り消しを求め東京地裁に提訴。同日、台湾の楽生療養院入所者25人らが厚生労働省に補償請求を行うが、10月に不支給処分となる。

▼10月10日 『高松宮記念ハンセン病資料館10周年記念誌』を発行。内容は、10年間の活動の記録と写真、常設展示、館内施設紹介、語り部活動、関連資料、年表。当時の展示を全て写真で掲載した。

▼10月22日 日本財団ビル（東京都港区）で、笹川記念保健協力財団の創立30周年記念式典が開催された。同財団はWHOへの協力を通じて現在もハンセン病の発病率が高い国々に対し、医師の派遣や多剤併用療法の普及などに取り組んでいる。

日野原重明会長の挨拶の後、湯浅洋常務理事から「世界のハンセン病対策と財団の貢献」、笹川陽平理事長から「私の考えるハンセン病制圧」と題する記念講演が行われた。

▼12月17日 楽生療養院入所者25人が、不支給処分の取り消しを求め東京地裁に提訴。

## 2005（平成17）年

▼1月11日 南野のの智恵子法務大臣が吉戒修一人権擁護局長らとともに全生園に来訪。その後山吹舎、望郷の丘を視察。中央集会所で自治会執行委員と懇談したが、南野法相は前日島根県平田市で不用意に差別的とも受け取られる発言をしたことを陳謝した。納骨堂で献花の後、資料館で大谷館長、ふれあい福祉協会の北川理事長らの出迎えを受け、2階の展示室を見学。その後応接室で懇談し、午後4時頃帰られた。

▼2月10日 厚生労働省において第14回ハンセン病資料館施設整備等検討懇談会が開催された。議



題は盛りだくさん。そのうち新館建設中のスケジュールは、2005（平成17）年9月より2007（平成19）年2月まで資料館は一時休館し、その間は全生園内の施設を借用することとなる。さらに、プレハブ建築や外部倉庫に資料などを保管し、新館建設計画を遂行することとなる。予算額9億2,500万円も提示された。敷地周辺では樹木124本の移植や伐採もはじまる。

▼2月26日～3月6日 御殿場地域イベントホールBE－ONE（静岡県御殿場市）において「国立駿河療養所60年の歩みと作品展」が開催される。開所から60年の歴史、写真、啓発パネル、入所者の作品（写真、短歌、書、彫刻、はり絵、押花）などの展示が来場者の目を愉しませた。

▼4月1日 学芸員・金貴粉採用。

▼3月1日 『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』がまとまる。報告書は「最終報告書」、「（別冊）ハンセン病問題に関する被害実態調査報告」、「（別冊）胎児等標本調査報告」の3分冊で構成され、総ページ数1,376ページの大作である。

▼5月14日～15日 ハンセン病に対する偏見や差別を解消し、ハンセン病に関する歴史の教訓をこれからの社会のあり方へ引き継ぐことを目的に、ハンセン病市民学会（以下、市民学会）設立総会・第1回交流集会在、熊本県の菊池恵楓園において盛大に開催された。参加者は支援者、研究者、弁護士、社会復帰者、入所者など全国から600人が駆けつけて熱気にあふれた。総会では規約、活動方針、役員人事などが決まった。その後記念講演、シンポジウム、市民交流集会在が開催され成功裡に終了した。

▼5月23日 東京地裁で韓国<sup>ソロクト</sup>小鹿島訴訟第4回弁論が行われた。韓国から来日した男女2人の証人が、午前11時から昼の休憩時間をはさんで午後4時20分まで、入所までの過程、入所後の厳しい労働や食料不足、日本人職員から受けた暴力、断種手術の様子などを克明に証言した。

▼6月21日～8月7日 開館12周年を記念し、「各園むかし写真展」を開催。会場は資料館常設展示室。

▼8月30日 1955（昭和30）年、らい予防法闘争

時の入所者からの要求を受け、らい予防法の付帯決議にもとづいて設立された国立感染症研究所・ハンセン病研究センターが創立50周年を迎え、記念のシンポジウムを午後1時30分より同センター講義室で開催される。

講師は竹森利忠（国立感染症研究所）、荒川宜親（同前）、小林和夫（大阪市立大学大学院教授）で、結核の問題や病原細菌などの講義に、63人の参加者は熱心に聞き入っていた。午後5時30分から会議室で懇親会が行われ、73人の関係者が参加した。森龍男、阿部正英、山崎修道、松尾英一など歴代の所長、全生園、大島青松園、呂久光明園、宮古南静園などの各園長、笹川記念保健協力財団の紀伊國理事長、厚生労働省医政局長の松谷有希雄、全療協の曾我野会長と本部員、全生園自治会執行委員など多彩な顔ぶれで、しばし懇談に包まれた。

▼10月25日 東京地裁で、韓国<sup>ソロクト</sup>の小鹿島病院、台湾の楽生療養院の入所者が補償の不支給処分を取り消しを求めている裁判の判決が出る。台湾の入所者については補償を認め、韓国の入所者については補償を認めないという、相反する判決となる。

▼10月 新館建設と既存館の改築工事を行うため、資料館の事務所を全生園研修棟に移し、そこでリニューアル後の新展示製作、活動方針、プログラムの検討、作成、図録作成などの作業に取り組むことになる。

また、研修棟内の会議室では、週1回程度来園する看護学生向けに語り部活動を行うとともに、復元された山吹舎で仮展示を行った。山吹舎1号室には雑居部屋を再現すべく、マネキン人形7体と生活用品などを展示、2号室には園内作業、文化活動、園内の子供、医療、運動などの写真パネル、3号室には歴史の流れや法令などを記載した年表、規定、園内通用券、「逃走患者名簿」などを展示した。4号室は市民との交流の場とし、団体が少人数の場合は語り部活動もここで行うことにした。団体人数が多数の場合は学芸員が山吹舎への案内を行った。

## 2006 (平成18) 年

▼1月29日 「世界ハンセン病の日」は毎年1月の最終日曜日と決まっているが、この日インドのニューデリーにおいて、「グローバル・アピール 世界に訴える「ハンセン病と差別」について」が発表された。治療面では進展が見られるが、社会的には未だ疎外され続けている患者・回復者の状況について「世界はあまりにも長い間彼らの苦しみに対して無関心でした」と指摘している。呼びかけ人は世界各地のノーベル平和賞受賞者や、各国指導者であった人々など12人。そのなかにはダライ・ラマ14世や、ジミー・カーター（元アメリカ合衆国大統領）、ラームスワーミ・ヴェンカタラマン（元インド大統領）、笹川陽平（日本財団会長）などが名を連ねている。患者・回復者への世界的な関心を高めるための問題提起である。

▼2月3日 ハンセン病補償法改正案が参議院で可決され、成立する。韓国や台湾などの国外のハンセン病療養所に入所させられていた人たちにも、一律800万円の補償金が支払われることとなる。

▼5月13日～14日 富山市において市民学会第2回総会・交流集会が開催され、2日間で1,400人が参加、予想を上回る大盛会となった。

▼5月19日 虎ノ門パストラル（東京都港区）において、全療協主催による「らい予防法廃止10周年・熊本判決5周年記念集会」が開催される。この集会には全療協各支部代表をはじめ、招待された第1次原告、予防法廃止とハンセン病国賠訴訟に尽力された各界代表、弁護士、国会議員、厚生労働省関係者、施設長協議会、検証会議、全原協、全医労、日患同盟、市民学会、映画『新・あつい壁』製作上映実行委員会、支援者ら1,100人を超す多彩な人たちが集まった。結成55周年を迎えた全療協の長年の活動の成果と、「ハンセン病」がようやく市民権を獲得した感を強くした。

▼6月26日 東北新生園で、旧新田小中学校葉の木沢分校校舎を整備した「しんせい資料館」が開館した。偏見や差別を語る写真や関係資料などを展示し、一般に公開。

▼9月7日 資料館運営委員会の終了後、運営委

員全員が佐藤工業の案内ではじめて新館建築現場の視察を行った。説明を受け納得する点も多かったが、その一方で現場を見て気づく点もあり、各委員が指摘を行った。

▼9月27日 検証会議で明らかにされた胎児標本は6施設で115体。そのうち全生園で明らかとなった36体を弔う慰霊祭が行われた。青崎登園長、佐川修自治会長、森亨ハンセン病研究センター長、柳澤伯夫厚生労働大臣（代読・外口崇健康局長）、宮里光雄全療協会長（代読・神美知宏事務局長）による慰霊の言葉があった。その後、参加者全員による献花が行われ、納骨堂への参拝も行われた。

▼11月11日 全療協主催のシンポジウム「ハンセン病療養所の未来をつくる—社会とのきずなを求めて—」が開催され、各地より600人以上が参加した。会場は星陵会館（東京都千代田区）。

▼11月27日 ふれあい福祉協会が事務所を資料館に移し、管理運営の業務内容などに、より密接に関わることになる。

▼12月12日 菊池恵楓園で社会交流会館（歴史資料館）がオープンする。同園の旧事務本館を改装したもので、隔離塀、希望の鐘、入所者の日用品など、貴重な資料200点を展示。

## 2007 (平成19) 年

▼1月～3月 館外に保管していた資料、用品などを全て資料館に戻し、学芸員3人を主軸に展示作業を行う。

▼3月31日 「高松宮記念ハンセン病資料館」を「国立ハンセン病資料館」と名を変えてリニューアルオープンする。午後1時20分、資料館玄関前において多数の来賓が見守るなか、柳澤伯夫（厚生労働大臣）、宮里光雄（全療協会長）、細渕一男（東村山市長）、北川定謙（ふれあい福祉協会理事長）の4氏によってテープカットが行われた。

午後1時40分、映像ホールにおいて「国立ハンセン病資料館再開館式」が行われ、柳澤厚生労働大臣、宮里全療協会長、対策議懇の津島雄二会長、最終解決議懇の江田五月会長が、それぞれの立場から今後の資料館活動に期待を込めた挨拶を行った。その後経過報告に入り、中島威夫国土交



通省関東地方整備局長による新館建設、旧館改装についての報告と、佐川修資料館運営委員による高松宮記念ハンセン病資料館のオープンより現在までの活動報告が行われた。その後内覧会に移り、170人の来賓がそれぞれ見学を行った。

資料館の運営は、厚生労働省からの委託を受け、ふれあい福祉協会が行うこととなる。



リニューアルオープン

▼4月1日 『国立ハンセン病資料館 開館記念誌』、『資料館だより』第55号発行。『資料館だより』は54号まではB5判白黒刷りだったが、55号よりA4判カラー刷りとなる。

▼4月1日～5月31日 リニューアルオープン記念「趙昌源<sup>ソククト</sup>絵画展—小鹿島の光と影」を、資料館企画展示室で開催。

▼4月4日～5月20日 「川島義教写真コレクション展」を、資料館ギャラリーで開催（川島は全生園入所者）。

▼4月9日～12日 宮古南静園で全療協第65回定期支部長会議が開催された。将来構想を進めるなかで療養所を医療機関として残すためには、現行の「らい予防法の廃止に関する法律」を廃止して、療養所を外部へ開放するための新法（ハンセン病問題基本法）をつくるべきだ、との意見が提起されたが結論が出ず、各支部へ持ち帰り検討することとなる。

▼5月11日～12日 群馬県草津町で市民学会第3回総会・交流集会が開催され、将来構想、基本法問題などが討議された。

▼6月6日 愛宕山弁護士ビル（東京都港区）で全療協第66回臨時支部長会議が開催される。「ハンセン病問題基本法」の立法化実現に向けて大半

の支部が賛成し、直ちに運動に取り組むことが確認された。全療協は在園保障部会、統一交渉団、ハンセン病対策協議会などの関係筋との協議をすすめ、地方自治体や立法府への要請を行うための署名活動、市民学会や全医労などのあらゆる団体への支援要請など、組織をあげて本格的に取り組むことになった。

▼8月5日 小笠原登に対し、生家円周寺がある愛知県甚目寺町より名誉町民の称号が贈られた。

▼8月5日～9月2日 「山本勝正写真展」を、資料館ギャラリーで開催（山本は全生園入所者）。

▼8月20日～24日 第30回ハンセン病医学夏期大学講座が、全生園、ハンセン病研究センターを会場として開催される。医師、医学生、看護職、看護学生、福祉職など47名が参加し盛会であった。

▼8月21日 豊島公会堂（東京都豊島区）で、「ハンセン病問題基本法」の制定を目指して100万人署名に取り組むべく、「ハンセン病療養所のあしたをひらく市民の集い」が500人の参加者を迎えて開催され、熱気に包まれた。

▼8月22日 都道府県会館（東京都千代田区）で、平成19年度ハンセン病問題対策協議会が開催される。厚生労働省の石田祝稔副大臣、外口崇健康局長ほか4名と、統一交渉団とが協議を行う。

▼9月4日～2008年3月12日 谷口たき（全生園入所者）の作品展「わたしの陶芸—谷口たき」を、資料館ギャラリーで開催。

▼9月22日 西武新宿線小平駅前「ルネこだいら」（東京都小平市）で、人権フォーラムin東京2007「沖縄からのメッセージ—ハンセン病のこと エイズのこと 共に生きるということ—」が開催される。主催はNPO法人HIV人権ネットワーク沖縄。午後2時と午後6時30分からの2回にわたって公演され、大盛況であった。

▼10月27日～12月23日 2007年度秋季企画展「こころのつくろい—隔離の中での創作活動—」を、資料館企画展示室で開催。入所者が製作した彫刻、陶芸、手芸、絵画など、たくさんの作品を展示し注目を集めた。11月17日には記念イベント「青い鳥楽団と私」を開催し、長島愛生園盲人会の人たちによるハーモニカバンドで長年活躍され

た近藤宏一さんを招き、ハーモニカの演奏と当時の思い出を語って頂き、参加者に多大な感動を与えた。

▼11月15日 成田稔が資料館長に就任。

▼11月19日 経済産業省会議室において第1回ハンセン病資料館等運営企画検討会が開催された。この会議は厚生労働省健康局長の諮問機関で、当日の議題は資料館の概要と平成19年度事業計画であった。

検討会の参集者は以下の13人。鮎京真知子（全弁連）、北川定謙（ふれあい福祉協会理事長）、國本衛（全原協事務局長）、神美知宏（全療協事務局長）、佐川修（資料館運営委員）、島田馨（第一三共株式会社監査役・座長）、鈴木眞理（東京大学大学院教育学研究科准教授）、半田昌之（たばこと塩の博物館学芸部長）、日比野守男（東京新聞論説委員）、増田利之（埼玉県加須市立礼羽小学校校長）、山内和雄（沖縄愛楽園長）、湯浅洋（笹川記念保健協力財団顧問）、横田洋三（人権教育啓発推進センター理事長）。

## 2008（平成20）年

▼1月 「ハンセン病問題基本法」の制定を目指して、全療協、全原協、全弁連、市民学会、ハンセン病首都圏市民の会、全医労、支援団体などが、全国各地で一斉に100万人署名活動を展開する。

▼1月17日 最終解決議懇（藤井裕久会長）総会に、統一交渉団がハンセン病問題基本法の立法化を要請する。

▼2月26日～3月2日 資料館学芸員が韓国に出張し、国立ハンセン病療養所である小<sup>ソロクト</sup>鹿島病院、定着村、ハンビ福祉協会を訪れ、視察を行った。

▼3月14日～4月20日 「太田明写真展」を、資料館ギャラリーで開催（太田は菊池恵楓園入所者）。

▼3月21日 厚生労働省会議室で、第2回ハンセン病資料館等運営企画検討会が開催される。

▼3月25日 統一交渉団が対策議懇に対し、ハンセン病問題基本法の立法化などを要請した。今回は施設長協議会、私立病院2院の管理者も出席

し、要請を行った。

▼4月24日 衆議院第二議員会館で開催された、対策議懇と最終解決議懇の合同総会で、統一交渉団が今までに集めた基本法成立を求める署名簿（80万6千筆）が手渡され、津島、藤井両会長より「今国会で必ず成立させる」との決意が示された。

▼4月26日～6月29日 2008年度春季企画展「ハンセン病療養所の現在」を、資料館企画展示室で開催。目的は入所者の高齢化と減少が進む療養所の今後のありようを考えるにあたって、一人でも多くの人に現状を知ってもらうことである。付帯事業として連続講演会「療養所の歴史を語る」を4回シリーズで開催した。講師と演題は以下の通り。6月22日、佐川修「栗生楽泉園の歴史」（午前の部）、平沢保治「多磨全生園の歴史」（午後の部）。6月29日、藤崎陸安「松丘保養園の歴史」（午前の部）、神美知宏「大島青松園の歴史」（午後の部）。

▼5月7日～20日 写真展「ハンセン病を撮る」が、資料館ギャラリーと東村山市役所にて開催される。趙根在、太田順一、寺島萬理子、船元康子、八重樫信之の作品を展示。主催は写真展実行委員会、市民学会などとともに資料館も共催に加わる。

▼5月10日～11日 「“療養所の社会化”の意義を考えよう」をテーマに、東京都で市民学会第4回総会・交流集会在開催された。初日は千代田区の日本教育会館で、2日目は多磨全生園で開催され、2日間で1,400人以上が参加して熱気に包まれた。全生園では3つの分科会、A「リニューアル資料館を考える」、B「胎児標本問題から私たちが学びとるものは何か」、C「戦争とハンセン病」が行われた。分科会Aには資料館から成田館長と佐川運営委員が参加し、資料館の現状とリニューアル後に寄せられた一部の批判に対して事情を説明した。

▼6月11日 「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」（ハンセン病問題基本法）が6月6日に衆議院で、6月11日に参議院で全会一致で可決され、成立した。基本法の制定を求める署名は90万筆を越え、最終的には93万4千筆に達した。



▼6月13日 衆議院第一議員会館で両議懇合同総会が開催され、超党派の衆・参議員22名、秘書多数が出席。津島、藤井両会長より基本法成立の報告が行われた。これに対し全療協、原告団、弁護団よりそれぞれ感謝の言葉が述べられた。その後出席各議員からも自己紹介と挨拶がある。さらに、駿河支部その他より、地元議懇立ち上げについて積極的な発言があった。



基本法成立後の両議懇合同総会

▼8月27日 東京都千代田区のグランドアーク半蔵門において、平成20年度ハンセン病問題対策協議会が開催された。協議会の構成は統一交渉団と厚生労働省で、厚生労働省からは舩添要一大臣と渡辺孝男副大臣が出席した。議題は①謝罪、名誉回復について、②社会復帰、社会内生活支援、③療養所の将来構想、④在園保障、⑤真相究明の5項目。まず副大臣から、この協議会や基本法をふまえ、今後も啓発・知識の普及を行う旨の表明があった。つづいて「ハンセン病を正しく理解する週間」は、今後は「ハンセン病療養所入所者等に対する補償金の支給等に関する法律」の施行日である6月22日を「らい予防法による被害者の名誉回復・追悼の日」として厚生労働省が行事を行い、内容については引きつづき統一交渉団と協議して行くことになった。

▼9月1日 『国立ハンセン病資料館 常設展示図録 2008』を発行。

▼9月10日 大谷藤郎前館長が名誉館長に就任。

▼9月27日～11月30日 2008年度秋季企画展「ちぎられた心を抱いて―隔離の中で生きた子どもたち―」を、資料館企画展示室で開催。療養所のなかの子供たちの集団生活や勉強、作文や短文

芸、幼い頃の故郷での思い出話などをインタビューで紹介。

▼11月5日 第3回ハンセン病資料館等運営企画検討会が、霞が関ビル（東京都千代田区）で開催される。主な議題は、資料館の運営委託先であるふれあい福祉協会理事長の辞任に至る経緯、常設展示の修正、運営費の会計報告などであった。

## 2009（平成21）年

▼1月31日～3月1日 企画展「北高作陶展―仲間を支えられて―」を、資料館企画展示室で開催。全生園入所者である北の陶芸作品50点を一堂に集めたはじめての個展で、壮観であった。なおギャラリーでは、全生園リハビリテーション科陶芸室の「多磨全生園陶芸室のあゆみ」展を同期間中開催した。

▼2月25日 第5回ヘルシー・ソサエティ賞のボランティア部門に資料館運営委員・語り部の佐川修が選ばれ、帝国ホテル（東京都千代田区）にて授賞式が行われた。同賞は、「国民の生活の質」向上に貢献した人びとを称える目的で、ジョンソン・エンド・ジョンソングループと社団法人日本看護協会が創設したもの。

▼3月11日 虎ノ門パストラルホテル（東京都港区）で、第4回ハンセン病資料館等運営企画検討会が開催される。議題は①2008年度事業の実施状況、②資料館運営委託先の変更、③展示作業部会についての3点であった。

▼4月1日 資料館の運営委託先が財団法人日本科学技術振興財団に変更となる。

▼同日 資料館の学芸課長に、黒尾和久が着任。

▼4月～6月 「隔離の百年―公立療養所の誕生―」展のプレ企画として、「公立療養所写真パネル展」を開催する。1909（明治42）年に開設された5カ所の療養所を紹介するパネルを、2週間ずつ展示。松丘保養園4月14日～4月26日、全生園4月28日～5月10日、邑久光明園5月19日～5月31日、大島青松園6月2日～6月14日、菊池恵楓園6月16日～6月28日。

▼4月15日～16日 虎ノ門パストラルホテル（東京都港区）で、全療協第68回定期支部長会議が開催される。議題は①将来構想、②定員削減問題、

③基本法施行にともなう諸問題などで、活発な論議が行われた。

▼6月9日～28日 資料館ギャラリーで「合志由布子作品展 音のない町並み一国立多磨全生園のスケッチー」が開催される（施設貸出）。

▼6月22日 厚生労働省が主催するはじめての「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典が、都道府県会館（東京都千代田区）で開催される。全療協、原告団、遺族、国会議員、厚生労働省関係者、療養所所長、一般市民など250人以上が参集した。

式典では1分間の黙祷、舩添要一厚生労働大臣の式辞、麻生太郎総理大臣のメッセージ（代読）、つづいて江田五月参議院議長、津島雄二、藤井裕久両議懇会長が来賓挨拶を行った。最後に小野田育代（元全生園看護師長）のスピーチ、東村山市立青葉小学校6年生2名の作文が発表された。

▼同日 平成21年度ハンセン病問題対策協議会が開催される。

▼7月25日～12月20日 2009年度企画展「隔離の百年—公立療養所の誕生—」を開催。会場は資料館企画展示室。

▼9月27日 企画展「隔離の百年」の付帯事業として、シンポジウム「隔離の記憶を掘る～全生病院「患者地区」を囲んだ「堀・土塁」～」を開催。120人の参加者があり盛況であった。

▼9月28日 1909（明治42）年に開設された公立（府県立）療養所5カ所のうち、全生園で「国立療養所多磨全生園創立百周年記念式典」が行われる。第一部では、松谷有希雄園長、佐川修自治会長が式辞を述べ、厚生労働大臣、東京都知事よりのメッセージ紹介、つづいて東村山市の渡部尚市長の挨拶があった。そのなかで渡部市長は、東村山市議会が全生園の100周年にあわせ「いのちとこころの人権の森宣言」を行い、本日公布したと述べた。さらに、東村山市内の小・中学生から公募した作文のうち、入選した3人による朗読が行われた。

第二部では、特別講演として笹川陽平（日本財団会長）と、大谷藤郎（資料館名誉館長）が講演を行った。笹川は「世界中のハンセン病施設へ治療薬を無料配布し、偏見・差別の解消および回復

者が社会に受け入れられることを目的として、国連人権委員会への提案や、インドで財団設立などを行っている」と述べた。大谷は、小笠原登医師との出会い、厚生省在籍時代の取り組み、退職後に人権意識の重要性に気づきたいきさつなどを話し、人権尊重の大切さを訴えた。

▼10月1日～12月6日 東村山ふるさと歴史館で、「全生園の100年と東村山」展が開催される。全生病院設立当時のいきさつや園内での生活などを写真や資料で紹介。当時園内で発行されていた機関誌『山桜』の印刷所についても展示。現在は『多磨』と名前を変えて発行されていることも紹介されていた。

▼10月6日 経済産業省別館会議室で、第5回ハンセン病資料館等運営企画検討会が開催される。運営委託先が日本科学技術振興財団に変更になってはじめての会議となる。議題は2009年度の事業計画であったが、各参集者からは終始、資料館のあり方についての発言が相次いだ。

▼11月17日 九段会館（東京都千代田区）で、午後6時より「ハンセン病隔離の100年を問う東京集会」が開催される。第一部は鮎京真知子弁護士（全弁連）の司会で、主催者を代表して宮里光雄全療協会会長が挨拶。つづいて鳩山由紀夫総理大臣のメッセージ紹介。来賓の横路孝弘（衆議院議長）、江田五月（参議院議長）、長妻昭（厚生労働大臣）、渡部尚（市町連絡協議会会長）、舩添要一（対策議懇会長）、川内博史（最終解決議懇会長）、遠藤隆久（市民学会事務局長）と錚々たるメンバーが、次々と差別意識、基本法、療養所の地域開放、将来構想、介護、統廃合などの問題について、それぞれの立場から発言、提言を行った。第二部では、群馬・いのちの証合唱団が合唱を4曲披露した。

第三部のシンポジウムは、徳田靖之弁護士（ハンセン病国賠訴訟西日本弁護士代表）の司会で、津島雄二（前対策議懇会長）、内田博文（九州大学大学院法学研究院教授）、神美知宏（全療協事務局長）、筈雄二（全原協会会長）が発言。「政治活動33年間の最後が基本法だった」、「履行するため贖罪の気持でやっていく」、「マスコミはハンセン病に不勉強のままだった」、「日本国憲法は隔離政



策を断罪するよりも覆い隠す役割を果たしてきた」、「基本法に魂を入れられるかどうかは市民の理解にかかっている」、「市民の支えのない運動は成功しない」、「真の人間回復、療養所の社会復帰、差別の連鎖を断つことが私たちの最後の望みだ…」などと語った。会場には雨のなか、800人がつめかけ大盛況であった。

## 2010（平成22）年

▼1月21日 らい菌を発見したアルマウエル・ハンセン医師が活躍したノルウェー王国より、ハンセン病関係資料の保存事業をしている3氏を資料館に招き、金沢大学との共催で、国際ハンセン病政策シンポジウム「ハンセン病医療政策と資料保存—日本とノルウェー—」を開催した。会場は資料館映像ホール。

第一部では、3氏にノルウェー王国の医療政策と資料保存についての特別講演をして頂いた。第二部では資料館運営委員・語り部の平沢と佐川を加えてシンポジウムを開催し、意見交換を行った。

▼1月30日～2月28日 企画展「桃生<sup>もろう</sup>小富士展」を、資料館ギャラリーで開催。桃生は東北新生園入所者で、自治会機関誌『新生』の表紙絵を描きつづけた。色紙に描かれた絵画30数点を展示した。2月13日は付帯事業として、男性4人ユニット「Everly」の演奏会を開催、雨のなか100人以上が参加した。

▼3月6日 東村山市が全生園の100周年を記念して作成した「いのちとこころの人権の森宣言」を後世に残すため、全生園自治会が納骨堂手前に宣言を刻んだ石碑を建立し、この日、除幕式が行われた。小雨のなか関係者70人以上が参加。

▼3月30日 『国立ハンセン病資料館ブックレット1 シンポジウムの記録 隔離の記憶を掘る～全生病院「患者地区」を囲んだ「堀・土塁」～』を発行。

▼同日 『ハンセン病図書館旧蔵書目録』を発行。

▼3月31日 『国立ハンセン病資料館 研究紀要 第1号』を発行。

▼同日 『国立ハンセン病資料館ブックレット2 ハンセン病関連法令等資料集』を発行。

▼同日 『国立ハンセン病資料館 常設展示図録 2009』を発行。

▼4月24日～7月25日 2010年度春季企画展「着物にみる療養所の暮らし」を、資料館企画展示室で開催。付帯事業として、女性入所者によるギャラリートーク（5月29日、6月26日、7月24日）、学芸員による展示解説（6月5日、7月3日）を行った。

▼5月8日 岡山プラザホテル（岡山県岡山市）で、市民学会第6回総会・交流集会在開催される。会場には900人を超える参加者があり、熱気に包まれた。

▼5月21日 経済産業省別館会議室で第6回ハンセン病資料館等運営企画検討会が開催される。2009年度の事業実施状況、2010年度の事業計画、運営問題についての検討を行った。

▼6月22日 全国都市会館（東京都千代田区）で「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典が行われる。参加者は280人。

午後は平成22年度ハンセン病問題対策協議会が開催される。議題は①名誉回復措置の継続、②ハンセン病療養所職員の国家公務員定員削減からの除外、重監房（栗生楽泉園）の再現と保存など。

▼7月20日 2002年から刊行されてきた『ハンセン病文学全集』全10巻（皓星社）が完結した。

▼8月7日～29日 パネル展「世界の島は語る」を、資料館ギャラリーで開催。製作は長島愛生園歴史館。

▼8月9日～13日 第33回ハンセン病医学夏期大学講座が開催され、受講者が資料館を見学。入所者、退所者との交流集会在行われた。

▼9月25日～12月26日 2010年度秋季企画展「全生病院」を歩く一写された20世紀前半の療養所一」を、資料館企画展示室で開催。開院当時から終戦直後までの園内の様子を写した70点の写真展である。付帯事業として、学芸員による展示解説（10月17日、11月21日、12月19日）、講演会とセットの全生園フィールドワーク（11月6日）を行った。

▼9月6日～12日 資料館の黒尾学芸課長と長島愛生園歴史館の田村朋久学芸員が、ノルウェー王国ベルゲン市に出張し、ハンセン病関連史跡、

博物館、資料保存機関を訪問し、現地研究者や関係者との交流を行った。

▼10月5日～15日 「コンウォール・リー女史と聖バルナバ・ミッション展」が、資料館ギャラリーで開催される（施設貸出）。主催は日本聖公会北関東教区聖バルナバ・ミッションとリー女史記念事業推進委員会。

▼10月27日 菅内閣の改造で就任した細川律夫厚生労働大臣が、資料館を視察。

▼10月 小・中学生の来館者数の増加を図る目的で、団体見学に対する無料送迎バスの試行運転を開始。

▼11月24日～26日 韓国ハンビ福祉協会主催の「世界ハンセン病フォーラム」がソウルで開催され、資料館から黒尾学芸課長と金学芸員が参加し、資料館の設立経緯や活動内容の紹介を行った。世界各国のハンセン病関係者、韓国立着村の方々など約4,000人が参加し、活気ある催しとなった。

▼12月7日 大谷藤郎資料館名誉館長が埼玉病院で逝去。12月12日に青山斎場で、大谷家、国際医療福祉大学合同葬が行われた。

## 2011（平成23）年

▼2月11日～3月6日 30年以上作陶活動をつづけてきた高山勝介（全生園入所者）初の個展「高山勝介作陶展」を、企画展として資料館ギャラリーで開催。それまでの歩みを物語る写真、妻寿美枝さんの語りを掲載したパネル、作品30点（展示替えを行い計53点）を展示し、来館者の注目を集めた。

▼3月26日～4月10日 写真展「みちのり 旧ハンセン病図書館員 山下道輔氏 2002～2010」が、資料館ギャラリーで開催される（施設貸出）。全生園入所者で資料館設立にも携わった山下道輔が、長年、全生園の元ハンセン病図書館でハンセン病関係の資料や文献の収集に尽力したことを示す記録写真を展示。撮影と展示は写真家の黒崎彰。

▼3月31日『国立ハンセン病資料館 研究紀要 第2号』を発行。

▼4月23日～7月24日 2011年度春季企画展

「かすかな光をもとめて―療養所の中の盲人たち―」を、資料館企画展示室で開催。付帯事業として、タケカワユキヒデを講師に招き、講演会「多磨盲人会ハーモニカバンドの思い出」を6月12日に開催。さらに7月10日には、盲人による文芸作品の朗読コンサートを開催し好評を博した。朗読は宴堂裕子（俳優）、小池保（元アナウンサー）、アコーディオンは渥美知世。

▼5月11日～12日 東日本大震災の影響で1カ月延期された全療協第72回定期支部長会議が、松丘保養園にて開催される。基本法の完全実施、賃金職員の定員化問題などのほか、震災の被災者を療養所に受け入れる意思を表明し、その実行を厚生労働省に申入れることを決議した。

▼5月20日～23日 市民学会第7回総会・交流集会が、沖縄県名護市と宮古島で開催される。

▼5月21日～6月26日 企画展「いのちの詩 塔和子展」を、資料館ギャラリーで開催（塔和子の会との共催）。付帯事業として①「沢知恵 塔和子をうたう ピアノ弾き語りコンサート」（5月28日）、②詩選集『希望よあなたに』の朗読・読書会（5月29日、6月11日）、③映画『風の舞』上映会（6月11日）を開催した。

▼5月27日 第7回ハンセン病資料館等運営企画検討会が、経済産業省別館会議室で開催される。2010年度の事業実施状況、2011年度の事業計画などを検討。

▼6月22日 「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」にあたるこの日、厚生労働省正面玄関の前庭に建立された「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の碑」の前で、関係者140人が参加して除幕式、式典が行われた。式典でははじめに細川律夫厚生労働大臣が式辞を述べ、つづいて細川厚生労働大臣、大塚耕平厚生労働副大臣、神美知宏全療協会長、笹雄二全原協会長、奥晴美遺族代表の手によって除幕が行われた。

除幕の後、菅直人総理大臣、江田五月法務大臣、川内博史及び中曽根弘文両議院会長、笹雄二、神美知宏、奥晴美が順次挨拶を述べた。

▼同日 平成23年度ハンセン病問題対策協議会が都道府県会館（東京都千代田区）で開催される。



会場一杯の関係者、支援者が見守るなか、療養所職員の定員削減阻止、賃金職員の早期定員化などの懸案事項が検討された。

▼8月27日～9月25日 企画展「伊藤秋夫写真展」を、資料館ギャラリーで開催。伊藤は駿河療養所入所者。生前の伊藤が四季を通して富士山を巡り、撮りつづけた20数点の写真を展示し、見る人に感動を与えた。なお、『われ山に向かいて目を上ぐ—伊藤秋夫写真集』が前年4月に発行されている。

▼10月1日～12月27日 2011年度秋季企画展「たたかいつづけたから、今がある—全療協60年のあゆみ—1951年～2011年」を、資料館企画展示室で開催。全国国立療養所患者協議会（後の全患協、全療協）誕生、らい予防法闘争、職員への看護切替と六・五闘争、医療改善デモ、年金闘争、沖縄二園の「本土並み」実現要求、生活処遇、施設整備、らい予防法廃止、ハンセン病国賠訴訟、熊本地裁判決など1万枚以上の写真から選んだ100枚を展示した。ハンセン病問題の歴史的変遷の動因への理解を深め、なおかつそれぞれの時期の運動の成果を実感として捉えることのできる企画展となった。

▼10月19日 野田佳彦内閣の厚生労働大臣に就任した小宮山洋子大臣が全生園と資料館を訪れ、視察を行った。全生園では全療協、自治会代表らとの懇談後、松谷園長の案内で園内を見学し、納骨堂での献花を行った。その後資料館に来館し、平沢（語り部）と黒尾（学芸課長）の案内で、展示室を見学した。

▼11月3日 「第38回国立療養所多磨全生園まつり 人権パネル展」が、資料館ギャラリー・研修室で開催される。多磨全生園および世界人権宣言などのパネルの展示、人権に関するビデオ上映を行った（施設貸出）。主催は東京法務局、東京都人権擁護委員連合会。

▼11月5日 「第11回ハンセン病問題に関するシンポジウム—沖縄からのメッセージ」が、厚生労働省、法務省、静岡県、浜松市、全国人権擁護委員連合会の主催で、浜松市福祉交流センター（静岡県）で開催された。

▼11月16日～20日 「草津のかあさまコンウォー

ル・リー女史と聖バルナバ・ミッション展」が、資料館ギャラリーで開催される（施設貸出）。主催は「日本聖公会北関東教区聖バルナバ・ミッションとリー女史記念事業推進委員会」。

▼11月12日～12月3日 秋季企画展の付帯事業として、毎週土曜日、資料館映像ホールで「わたしの運動の記憶」をテーマに講演会を行う。週替わりで佐川修（全生園自治会長、11月12日）、平沢保治（全生園前自治会長、11月19日）、神美知宏（全療協会長、11月26日）、鈴木楨一（元全患協事務局長、12月3日）が講演を行った。

## 2012（平成24）年

▼1月30日 ブラジルにおいて、「グローバル・アピール2012」が世界医師会とその加盟各国医師会による共同宣言として発表される。笹川陽平（日本財団会長、WHOハンセン病制圧特別大使）の呼びかけによるもの。

▼2月2日 ハンセン病問題対策促進会議の第1回会議が、資料館映像ホールで開催される。この会議は、各都道府県のハンセン病問題への取り組みを支援することを目的として厚生労働省健康局疾病対策課が主催するもので、全国41都道府県のハンセン病問題担当者が参集した。はじめに趣旨説明、神美知宏全療協会長の講演があり、その後厚生労働省の取り組みの報告と、各担当者より啓発や交流活動の状況などについて、それぞれ報告があった。

▼3月24日～4月15日 「みちのり（二） 元ハンセン病図書館員 山下道輔氏 黒崎彰写真展」が、資料館ギャラリーで開催される（施設貸出）。

▼3月31日 『国立ハンセン病資料館 研究紀要 第3号』を発行。

▼4月28日～5月10日 寺島萬里子写真展「韓国・台湾のハンセン病」が、資料館ギャラリーで開催される（施設貸出）。

▼4月28日～7月29日 2012年度春季企画展「青年たちの「社会復帰」—1950-1970—」を、資料館企画展示室で開催。付帯事業として、学芸員によるギャラリートーク（5月19日、6月16日、7月21日）、中修一（社会復帰者）による講演会「“社会復帰10年”—中修一さん 2回の社

会復帰をととして一」(6月10日)を実施した。

▼5月23日 第8回ハンセン病資料館等運営企画検討会が、厚生労働省共用第6会議室で開催される。議題は資料館の2011年度事業実施状況および2012年度の事業計画であるが、重監房再現計画についての質疑応答も行われた。

▼6月13日 辻泰弘厚生労働副大臣が、全生園、資料館を視察。展示室を見学する。

▼6月22日 午前、厚生労働省前庭で「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典が、多くの来賓、関係者出席のもと雨のなか開催される。

▼6月26日 中国四川省癩予防協会理事6名が来館。展示室を見学し、語り部と懇談。全生園の施設も見学された。

▼7月1日 全生園の将来構想の一環として誘致された花さき保育園(私立認可保育所)で、「花さき保育園新園舎を祝う会」が、小宮山洋子厚生労働大臣ほか多くの来賓を迎えて開催された。



花さき保育園新園舎を祝う会

▼7月12日 市町連絡協議会(会長・渡部尚東村山市長)が鹿児島県鹿屋市で総会を開催。ハンセン病問題に関する12項目を決議し、国へ要請を行った。

▼7月24日～8月26日 大阪人権博物館において、資料館の巡回展「たたかいつづけたから、今がある—全療協60年のあゆみ—1951年～2011年」を開催する。

▼8月28日 韓国から麗水愛養園事務局長、政府関係者、大学教授など、4人が資料館の視察のために来館。

▼9月8日～9月30日 資料館ギャラリーにお

いて、「生きるって、楽しくって ハンセン病を生きた山内定・きみ江夫妻の愛情物語 片野田斉写真展」が開催される(施設貸出)。9月8日、22日に山内きみ江(全生園入所者)の体験談を聞く座談会を開催。

▼9月23日～26日 奈良県天理市の「ギャラリーおやさと」において、資料館でも開催した「北高作陶展」を開催した(出張展示)。付帯事業として、天理大学ふるさと会館において講演会北高「私と陶芸」、儀同政一(資料館図書室長)「ハンセン病を知っていますか?」を開催した(9月25日)。

▼10月6日～12月27日 2012年度秋季企画展「癩院記録—北條民雄が書いた絶対隔離下の療養所—」を、資料館企画展示室で開催。付帯事業として清原工(『吹雪と細雨・北條民雄・いのちの旅』の著者)の講演会「北條民雄・人と作品」を資料館映像ホールで開催した(11月10日)。

▼10月24日 野田内閣改造にともない就任した三井舜雄厚生労働大臣が全生園と資料館を視察。全生園で全療協本部、自治会役員との面談、納骨堂での献花を行う。その後資料館に来館し、常設展と企画展を見学した。

▼10月24日～25日 笹川記念保健協力財団主催、資料館協力で、「国際ハンセン病歴史保存ワークショップ」(非公開)を資料館研修室、映像ホールで開催した。ブラジル、マレーシア、フィリピン、台湾、オーストラリアから関係者が参加。

▼11月3日 「第39回国立療養所多磨全生園まつり 人権パネル展」が、資料館ギャラリーと研修室にて開催される(施設貸出)。主催は東京法務局、東京都人権擁護委員連合会。多磨全生園および世界人権宣言などのパネルの展示、人権に関するビデオ上映が行われた。

▼11月5日 ハンセン病療養所の将来構想をすすめる会の主催で、「いまハンセン病療養所のいのちと向き合う!～実態を告発する市民集会～」が、科学技術館(東京都千代田区)地下1階サイエンスホールで開催され、480人が参加した。

▼11月7日～11日 資料館ギャラリーにおいて、3回目となる「草津のかあさまコンウォール・リー女史と聖バルナバ・ミッション展」が開催さ



れる（施設貸出）。主催は、「日本聖公会北関東教区聖バルナバ・ミッションとリー女史記念事業推進委員会」。

## 2013（平成25）年度

▼1月31日 前年11月23日に亡くなった曾我野一美元全療協会長を偲ぶ「曾我野一美さん追悼集会」が、東京都千代田区の星陵会館で開催された。会場には全療協、原告団、弁護団、議員懇談会、市民団体など生前親交のあった200人以上が参加。全療協会長、全原協会長などをつとめ、常に第一線で活躍され、たよりにされた人柄が偲ばれた。

▼同日 『国立ハンセン病資料館 常設展示図録 2012』を発行。

▼2月1日 成田稔『国立ハンセン病資料館ブックレット3 看護の足もと “看護の行為と看護の原理”を問いなおす』を発行。

▼2月15日 厚生労働省健康局長が招集する第2回「歴史的建造物の保存等検討会」が厚生労働省専用第17会議室で開催された（第1回は前年9月18日に開催）。初のヒアリングとなった今回は、中尾伸治（長島愛生園自治会長）、佐川修（全生園自治会長）、金城雅春（沖縄愛楽園自治会長）よりそれぞれ事情説明が行われた。

▼3月12日 厚生労働省健康局疾病対策課主催の平成24年度ハンセン病問題対策促進会議が、資料館映像ホールで開催され、全国38都府県から担当者が出席した。

▼3月31日 『国立ハンセン病資料館 研究紀要 第4号』を発行。

▼5月11日～8月11日 2013年度春季企画展「一遍聖絵・極楽寺絵図にみるハンセン病患者～中世前期の患者への眼差しと処遇～」を開催した。付帯事業として極楽律寺の田中密敬住職の講演会「極楽寺境内絵図を紐解く」（6月1日）、遊行寺宝物館館長の遠山元浩氏の講演会「一遍聖絵の世界」（7月23日）を開催した。なお、6月22日から7月5日までの期間、藤沢市の清浄光寺（遊行寺）より神奈川県指定文化財『一遍上人縁起絵』を特別に借用し、展示した。

▼5月11日～12日 熊本市でハンセン病市民学

会第9回総会・交流集会在、「いま「いのち」の意味を問う！」を全体統一テーマとして開催された。

▼5月15日 衆議院第二議員会館で、最終解決議懇が開催された。川内博史会長が総選挙で落選したため、新役員を決定。新会長に平沼赳夫（衆・日本維新の会、岡山）、副会長に細野豪志（衆・民主、静岡）、事務局長に森山ひろし（衆・自民、鹿児島）、事務局次長に玉木雄一郎（衆・民主、香川）、顧問に江田五月（参・民主、岡山）、以上が全会一致で承認された。つづいて全原協の弐雄二会長、全療協の神美知宏会長より平沼会長へ要請書が手渡され、出席各支部代表からも要請を行い、最後に平沼新会長より要請内容の実現へ向けての決意表明が行われた。

▼6月3日～4日 全療協の2014年度予算要求統一行動が行われ、ハンセン病問題基本法の完全実施、療養所職員の定員問題などが協議される。神会長は「今年は職員定員問題に決着をつける。厚生労働大臣、安倍晋三総理大臣にも面会を要請しており、場合によってはハンスト、座り込みなど実行使に入る」との決意表明を行い、厚生労働省との交渉に臨んだ。

▼6月21日 雨のなか、厚生労働省正面入口左側に設置された追悼の碑の前で、厚生労働省主催の「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典が開催された。はじめに全国の療養所で亡くなった16,298柱の御霊に対し黙祷が捧げられた。田村憲久厚生労働大臣の式辞につづき、安倍晋三総理大臣、伊吹文明衆議院議長、平田健二参議院議長らのメッセージが紹介され、中曽根弘文対策議懇会長が来賓挨拶を行った。次いで追悼の碑への献花が行われ、平沼赳夫最終解決議懇会長、宮里良子遺族代表、弐雄二全原協会長、神美知宏全療協会長らが挨拶を行った。弐、神両会長はハンセン病療養所の職員定員問題について、「納得できる回答がなければハンストなどの実行使に入る。苦難のなか亡くなった多くの先輩たちが、安眠できるような回答を求めたい」と訴えた。

▼同日 午後2時より都道府県会館で平成25年度ハンセン病問題対策協議会が開催された。資料館

の収蔵庫の問題も議題に取り上げられたが、最大の課題は療養所の職員定員問題で、事態の深刻さがうかがわれた。

▼6月25日 映像ホールにおいて資料館の開館20周年記念式典が挙行された。司会の黒尾学芸課長の開会の辞に続き、成田稔館長及び矢島鉄也厚生労働省健康局長より主催者挨拶が行われた。成田館長は、ハンセン病をめぐる無知とそれを支える「イエ」や「世間」の問題などを指摘し、「本当の名誉回復のために今後とも活動の幅を広げたい。館の発展に引き続きご支援をお願いしたい」と述べた。

矢島健康局長は、ハンセン病国賠訴訟後の内閣総理大臣談話に資料館の充実が盛り込まれたことをふまえ、「ハンセン病問題基本法の理念のもと記憶や歴史の風化を防ぎ、資料や情報を後世に伝え国民に正しい知識を提供する本拠地として、今後ますます資料館の活動が期待される」と述べた。

つづいて神美知宏全療協会長、渡部尚東村山市長より来賓祝辞があった。神会長は、らい予防法廃止と資料館開館を導いた大谷藤郎初代館長の功績を称えるとともに、「入所者の高齢化と加速度的な減少を前に、将来構想の重要性和資料館の意義が増大している」と述べた。渡部市長は、2007年のリニューアル直後に様々な批判を受けつつも資料館が成長してきた姿を振り返った。また市として全生園との歴史的なつながりとともに、小中学生が資料館を人権学習の場として活用しており、今後も東村山市は資料館とともに歩んでいきたいと述べた。

次に運営委託団体挨拶として、坪井健司日本科学技術振興財団監事より、資料館の歴史の概略と、正しい科学的知識を伝えるという立場から運営を受託し、職員の待遇改善や来館者増加に尽力していること、さらなる充実を目指して努力したいとの抱負が述べられた。

最後に祝電披露があり閉会となったが、大雨にもかかわらず関係者76名が参加した。

▼同日 開館20周年記念式典の後、1階ロビーにおいて「大谷藤郎先生」胸像除幕式が開催された。この胸像は大谷と関わりの深かった全生園自

治会が、大谷の功績を称えるために入所者や松丘、栗生、駿河各支部よりの寄付も受けて製作し、大谷が初代館長でもあるため資料館が借りて展示することとなった。成田館長の式辞の後に除幕、つづいて志田彊全生園自治会副会長が大谷の功績にふれながら「大谷先生のハンセン病にたいするあつい想いを後世に遺すために胸像を製作した。来館者にこの想いが伝わることを願っています」と、佐川修全生園自治会長の挨拶を代読した。次いで胸像製作者の澄川喜一元東京芸術大学学長が挨拶。「人権を守って偏見をなくすことをここに立って見守ってくれればと心を込めてつくった」と語った。

最後に大谷の息女である大谷すみれが、当館が開館してから亡くなるまでの大谷の様子や、自身が幼い頃からの入所者との思い出を語り、「父のことを時々思い出してくれたら幸せです」と挨拶された。胸像は在りし日の大谷のやさしさや情熱を感じさせるものなので、多くの方にご覧になって頂きたい。

▼同日 開館20周年にあわせて『国立ハンセン病資料館 20周年記念誌』と『資料館だより』復刻版—20年のあゆみ—第1号（1993年10月1日）—第79号（2013年4月1日）』を発行した。

▼6月25日～7月28日 20周年記念展「存在意義を継ぐために知る、活動の記録」を、資料館ギャラリーで開催。資料館20年の歩みを物語る写真、文書、発行物などを展示する。

▼6月27日 聖路加国際病院名誉院長の日野原重明医師を講師に招き、全生園コミュニティセンターにおいて資料館20周年記念講演会を開催した。講演で日野原医師は「ハンセン病の患者に生涯を捧げた神谷美恵子医師の生き方」と題して、スライドを使いながら神谷医師の生涯と功績を、自らの医師としての思いを重ねながら話された。その101歳とは思えないほどの力強いスピーチは、会場につめかけた約300人の聴衆を驚かせるとともに、深い感動を与えた。

## あしがき

以上、資料館開館20周年記念式典、記念行事までの記録を「国立ハンセン病資料館20周年のあゆ



み」としてまとめた。らい予防法廃止、ハンセン病国賠訴訟、全療協、全原協、全弁連、両議懇、市民学会、市民団体、厚生労働省、各園の動きなども、入所者、資料館にとっては何らかの関係があると思っており、ハンセン病を正しく理解してもらうため、市民に伝える使命があると思っている。

青森から沖縄まで全国13の国立ハンセン病療養所には、1,797人（2014年8月31日現在）の入所者がおり平均年齢は83歳を超えている。終焉間近と言われているが各園にはそれぞれ資料展示施設がある。どうか最寄りの療養所を訪ねて「ハンセン病」への理解と知識を深めて頂きたい。